

第 22 回全国修学旅行研究大会

大会概要

平成 17 年 11 月 12 日（土）実施

会場：日本科学未来館（みらい CAN ホール）



財団法人全国修学旅行研究協会

目次

主催者挨拶 (p 1)

中西 朗 (財団法人全国修学旅行研究協会理事長)

全修協提案 (p 2-4)

「修学旅行における危機管理について」

久保行正 (財団法人全国修学旅行研究協会理事・調査研究部長)

実践発表 1 (p 5-8)

「体験活動から学ぶこと」

高山利三郎 (千葉県我孫子市立湖北台中学校校長)

実践発表 2 (p 9-13)

「受け入れ側としての修学旅行への期待」

岸本 登 (大津市びわ湖畔「八景館」代表取締役社長)

シンポジウム (p 14-37)

「学びを中核とした修学旅行の創造」

コーディネーター：

新井郁男 (放送大学教授・埼玉学習センター所長、上越教育大学名誉教授)

パネリスト：

吉田 章 (筑波大学大学院教授)

高山利三郎 (千葉県我孫子市立湖北台中学校校長)

後藤 太 (全日本空輸株式会社東京支店法人販売部文化交流担当部長)

石塚浩哉 (近畿日本ツーリスト株式会社東京第 1 教育旅行支店次長)

【資料】

財団法人全国修学旅行研究協会・提案資料 ~ 修学旅行における危機管理について ~

千葉県我孫子市立湖北台中学校・提案資料 「体験活動から学ぶこと」

第22回全国修学旅行研究大会主催者挨拶

財団法人 全国修学旅行研究協会

第22回全国修学旅行研究大会が開催できますことに、感謝の念でいっぱいです。主催者を代表して一言御礼の言葉を述べさせていただきます。

ご来賓の近畿日本ツーリスト教育旅行部長・岡野正巳様、近畿地区公立中学校修学旅行委員会・橋戸常年様、東海三県修学旅行委員会・加藤學様、関東地区修学旅行委員会・中山邦男様をはじめ、実践報告して下さる方々、シンポジウムを展開して下さる方々等、この研究会にお力添えをいただきましたことに心から御礼申し上げます。また、格段のご配慮ご面倒をいただきました日本科学未来館のご好意に深く感謝申し上げます。

今、子どもたちの人間力を豊かに育てるために「新しい時代の義務教育を創造する」活動が展開されています。その中で、各学校では特色を生かした教育活動の一環として、創意工夫された修学旅行が実施されております。各地区修学旅行委員会でのご発表に見られましたように、教育課程上の位置づけを明確にする「学びを中核とした修学旅行」が志向されております。今後とも、修学旅行をより一層意義ある活動にするために、[質の高い感動][多くの出会いの喜び]を通して、「人としての生き方」に焦点を当てて、人間としての成長にかかわっていく姿を探りたいと思います。

この修学旅行は、多くの方々によって支えられています。先生方のご尽力、ご両親のご負担はもとより、交通、宿泊、活動を担って下さる方々により、修学旅行での夢づくりがなされています。

本日の実践報告は、学校の立場として、高山校長先生から「体験活動から学ぶこと」、受け入れ側として、岸本八景館社長から「修学旅行への期待」を語っていただきます。また、本部として、「修学旅行における危機管理」について久保理事が提案します。シンポジウムは新井郁男先生をはじめ、そうそうたる方々がこれからの修学旅行の方向を語ってくれます。

このセミナーの目的の一つに、各地の情報交換があります。その一環として、各地の情報パンフレットが寄せられていますので、是非ご利用ください。

最後になりましたが、ご後援、ご協賛いただきましたことに深く感謝いたしますとともに、ご多忙の中ご参加くださいましたことに御礼申し上げます。

実り多い研究会になりますことを期待して、ご挨拶といたします。

平成17年11月12日

「修学旅行の危機管理について」

皆さんこんにちは。全国修学旅行研究協会の久保と申します。よろしくお願ひします。

今年6月より「修学旅行の危機管理について」というテーマで北海道から沖縄まで全国公立中学校約10,000校ございますが、その三分の一にあたる約3,600校の学校にアンケート調査を致しました。

約2,000校から回答をいただき、今のところ1,356校を集計したところです。

アンケートの質問項目は、1ページに書いてあるとおりです。集計結果のまとめは、2ページから5ページにあるとおりですので、あとでご覧いただきたいと思ひます。アンケートをとって気づいたことは、校長先生方が、修学旅行の細部に渡り生徒の安全を考え、それを実践していることです。それでも多くの問題点や悩みを抱え、対応に苦慮していることも事実です。

回答の中身を精査してみますと、回答の多い物は重要な物が多いのですが、少数意見の中にも、気づきにくいけれど、示唆に富むご意見も多数見られました。これらのことを、参考に「修学旅行の危機管理について」と題して全修協の提案をしたいと思ひます。

それでは、こちらの映像を見ながら、全修協の提案をさせていただきます。アンケートにありましたように、修学旅行における危機管理は事故にあってからの対応だけでなく、事故に遭わないように万全の準備をすることから始まります。そのため修学旅行の企画時から、まとめて次年度に引き継ぐまで、危機管理の観点で見ることが肝心です。

第1番目の提案は、**修学旅行の計画**です。一つ目の情報収集では、事前の下見、前年度の引継ぎ事項と共に、旅行業者、旅館からの情報があります。その他、保健所や警察など関係機関からの情報も危機管理を意識した計画の立案には重要な要素です。

二つ目は、学校目標すなわち、修学旅行は日常の学校生活の延長とする考え方です。修学旅行は学校生活の総仕上げとして、児童・生徒の人間形成の上で重要な役割を担っています。旅行計画設定にあたって、具体的な目標を設定し、児童・生徒が意欲的な活動を展開するような仕組みを取り入れて欲しいと思ひます。

三つ目は、ゆとりのある計画です。あわただしい日程の中では、周りの人に配慮する心のゆとりもなくなります。落ち着いて活動できることで安全意識も高まり、グループの人間関係も高まり思い出に残る修学旅行にもなるでしょう。

四つ目は、生徒自身の計画への参画です。生徒がどこまで計画作りに参画できるかは学校の体制や生徒の実態で変わると思ひますが、参画することで、生徒の目的意識、事前学習意欲が高まり意欲的に参加するなど、物見遊山にならない活動が形成されると考えます。

第2番目の提案は、**危機管理対策**です。修学旅行中に起こりうる様々な危機を予測し、起きた時の対策と、対応の仕方についての問題です。

第一番目に、修学旅行における危機管理マニュアルの作成です。最近の不審者の問題等

で、各学校では既に、危機管理マニュアルがあると思われます。知らない場所であること、指導人数の違い、班行動など日常の校内体制との違いを明確にし、学校の危機管理マニュアルに準じて、更に学校の実情に応じて作成すると良いでしょう。作成にあたっては、関係機関との連携等も必要に応じてされると良いでしょう。

アンケート調査で、自校のマニュアルをお送りして頂きましたので、違うタイプのもの3点を添付しておきました。資料1は、トラブル等への対応についてと題してトラブルの内容に応じて作成されています。資料2は、場面別対処マニュアルと題して出発から帰るまで時程をおって、対処法をあげています。資料3は、緊急時の対応の仕方と題して基本的な連絡系統を図式化して、分りやすく示しています。資料4は、旅行会社で出している物ですが、現地支店等の組織も活用できますので、旅行会社との連携は、不可欠です。

事故の当事者はもちろん、同行生徒たちの心のケアも必要に応じて、短期的に、また、長期的に考えておかなければならない問題です。次に緊急連絡網を含めた緊急連絡対策です。特に、班行動など職員の目の届かない状況での、緊急連絡体制は、不可欠です。

今は、携帯電話等があるので、生徒の報告、職員同士の情報交換、本部・校長からの支持命令対応等、幅広く活用していると思われます。病院等の所在地と内容等、関係機関との事前の連携は、事があったときに、あわてず対応できます。

第3番目の提案は、**事前指導の徹底**です。せっかく、細かく配慮された計画や危機管理対策があっても、機能しなければ何なりません。

大人サイドでは、引率教員だけではなく、添乗員や、旅館、訪問先など各関係者の**共通**理解と共通指導が大切です。生徒側から考えても、計画や危機管理意識の高揚が望まれます。7ページに5項目あげておきましたが、危機管理対策の指導と理解の徹底が、事故回避につながると思います。少数ですが事故対応の行動シミュレーションを事前指導に取り入れて、実践対策であると同時に危機意識の高揚に効果をあげています。

アンケートでは少数意見でしたが、生徒には、一人一人に目的意識を持たせることが、取り組みを意欲的にし、自ら学ぶ修学旅行につながり結果的に事故回避につながるということになります。

5番目の集団行動の指導も現代の子どもたちには必要不可欠です。修学旅行を通して、集団行動のルール、集団の秩序、モラル、マナーの指導はこれから社会に生きていく生徒には、良い指導の機会というだけでなく、危険から身を守ることにともなります。

第4番目の提案は、万一事故が起きてしまったときの**補償問題**です。事故等の程度、生徒の状況にもよりますが、引率者としては、生徒の安全第一や二次災害防止を第一と考えるべきです。当事者のことと合わせて、保護者への説明責任や、誠意ある対応は最も大切な事です。けがや病気、事故の当事者同士の問題、管理責任の問題、自然災害等による交通の遮断とそれに伴う、交通費や宿泊費の問題等々、問題は様々です。

ここにあるように、多くの保険が用意されています。6ページに修学旅行に関するいくつかの保険の簡単な説明を調べておきましたが、参考にして頂きたいと思います。ア~オまでありますが、ア(旅行特別補償保険)は、大手旅行社の修学旅行契約には通常ついていようようです。イ(国内旅行傷害保険)ウ(旅行参加者保険)は、最近の修学旅行で一般的に使われている生徒の保険です。エ(学校保険)は、学校が入る保険です。最期のオ(修学旅行変更保険)は、航空機に関するものは以前からありましたが、新幹線及び新幹線と

特急等の組み合わせに適応するもので、今年新しくできた保険です。偶然の理由で予定変更になった場合の出費に対する保険です。

昨年、台風で新幹線が止まり関西から帰れなくなった学校が数校ありました。ある学校は、代替輸送のバスで夜中の2時ごろ帰ったということです。また、ある学校では、宿泊し、翌日の新幹線で帰ったということです。どのように対応するかは、校長の判断になるわけですが、この保険では、追加宿泊費、追加食費、追加交通費を補償します。昨年の経験からこの保険が開発されたと聞いています。2泊3日新幹線の場合、1日95円、往復割引180円で、15,000円まで補償されます。詳しいことは、旅行会社、保険会社等にお聞きください。

5番目の提案は、修学旅行は学校だけで作ることはできません。保護者、教育委員会、旅行業者、旅館・ホテル、見学施設、保健所、病院、警察、消防署など多くの関係機関との協力と連携が不可欠です。

全修協では、修学旅行を教育性、安全性、経済性の三つの観点から考えています。今日の研究大会のテーマはまさに教育性についてであり安全性への提案であります。

アンケートの結果より「修学旅行の危機管理について」提案させて頂きましたが、短時間の中で、十分に申し上げる事もできませんでした。

全修協ではこれらの多くの資料をもとに、関係の皆様のお力添えをいただきながら、修学旅行の実際について更にまとめて、ホームページや様々な形で、皆様にお示しして行きたいと考えています。

本日は危機管理をテーマに、全修協の提案をさせていただきました。以上を持って終了させていただきます。ありがとうございました。

「体験活動から学ぶこと」

発表者：千葉県我孫子市立湖北台中学校

校長 高山利三郎

こんにちは。まず、はじめに、このような発表の機会を与えていただきました関係者の皆様に御礼を申し上げたいと思います。さて、これから提案をするわけですが、特に私の学校が新しい試みをしているとか、新しい実践をしているというような内容ではありませんので、まずはお断りしておきたいと思います。また、このお話をいただいたのは、修学旅行が終わってからのことでしたので、資料等も不備な点があるかと思いますがよろしくお願ひしたいと思います。また、本大会は修学旅行ということがテーマですが、あえて体験学習という切り口をもとにして、私の学校の修学旅行について報告させていただきたいと思っております。千葉の我孫子から来ました高山です。よろしくお願ひいたします。

まずこれは（スクリーン映像資料）俳句が最初にあります。「語り合い涙した夏 糧となる 康一」、「照りつける初夏の陽射しとバスを待つ 宏美」、「朝の駅 夏飾る花まだ咲かず 洋子」、「夏の夜 夢の中でも修学旅行 祥吾」、「宝物 金魚描きし京扇子 千晶」。この作品は修学旅行が終わってから、3年生の生徒たちによって国語の時間に詠まれたものです。今年度の修学旅行も5月21日から23日、2泊3日ということで京都・奈良方面に実施いたしました。たくさんの思い出を残して無事に終了いたしました。そして、今月（11月）の4日からは、2年生によって、私の学校では「古都学習」と言っておりますけれども、来年度の修学旅行の取り組みがスタートいたしました。

さて、本校のことを少し紹介したいと思います。我孫子市は千葉県の北西部に位置し、利根川と手賀沼に挟まれた細長い地域で、人口約13万人。東京の方に勤務する人が多い、そういう都市であります。学校があります湖北台は、我孫子市のほぼ真ん中あたりに位置します。手賀沼に面して、特に公園の団地、湖北台という団地を擁する、そういう地域があります。今年で開校36年目、生徒数が現在343名ということで、かつてこれは昭和59年には1,133名という生徒がいたのですが、年々減少傾向にあります。

次に、学校教育目標についてお話ししたいと思います。「主体的によりよい生き方や望ましい学習のあり方を求め、実践する生徒を育成する」ということで設定をしております。また、目指す生徒像として、「自覚」、「自学」、「自立」。そして生徒たちに身につけさせたい力として、「学習力」、「社会力」、「道徳力」。こういうものを掲げて学校経営に携わっております。

次に、本校の特色を簡単に説明いたしますと、地域柄、大変ボランティア活動を盛んに行っております。例えば、この「駅前花壇づくり」というのは、成田線にありますJR湖北の駅前にある花壇を年2回、生徒たちの計画によってボランティアで花壇づくりをしているというものです。また向こうにあります「歩け歩け運動」という、これは地域の行事ですが、また、地域の健康まつりとか、こういうボランティアに、積極的に生徒たちが参加しているということがひとつの特徴というふうに言えるかと思っております。本校の教育活動の大きな柱になっております体験活動。これは今日この後、いろいろ提案することになりますが、様々な活動があります。これは後ほど詳細にお話ししていきたいと思っております。

また、本年度より3年間、文科省、県教委の指定による「学力向上形成拠点事業」という事業について、研究を始めたところであります。この研究は本校だけではなく、本校に通います2つの小学校と連携して進めていこうと考えています。

それでは次に、なぜ本校が体験活動を重視しているかということについてお話ししたいと思います。まず「体験」というのは「自分の身体を通して具体的・個別的に経験すること」。

そして体験活動とは、「知性」「感性」「情意」「身体」が相互に密接に絡み合う、全人格的な営みがなされる活動であると掲げてあります。そしてその活動の中から期待される力として、「共感力」「自立力」「生活実感力」そして「問題解決力」。これらものは、本校が掲げています「学習力」であるとか「社会力」そして「道徳力」。こういうものを身につけさせることができる活動だというふうに理解しております。そういうことに向けて、大きな柱として取り組んでおります。次に、本校の体験活動の体系について3つほど掲げてあります。一番目に「生徒の主体性を引き出す体験活動」、二番目に「生徒の個性を伸ばし、将来の生き方を考えさせる体験活動」、三番目に「他と強調し、思いやる心を育てる体験活動」。この体験活動の体系については、お手元の3枚目の資料に図として示してありますので、後ほどご覧になっていただければと思います。

それでは、1年生から本校ではどのような体験活動を通して、最後の3年間の集大成としての修学旅行を迎えるのかということについてお話ししていきたいと思っております。

1年生の体験活動であります。まず、入学してすぐ郷土のことについて勉強します。私たちは「我孫子学習」と言っておりますが、これは自分たちの郷土について関心をもって、そして課題別に別れ、調べ学習をして、現地を訪れるというようなものです。一つの体験学習の入り口という、そのような位置づけにしております。そして3学期に、これは進路の方とも関わりがあるのですが、キャリア教育の一つという捉え方をしてもいいと思っておりますが、「東京探索」というものを行っております。昨年度は24グループに分かれて、都内の博物館、テレビ局、科学館、そして専門学校であるとか、整備場、証券取引所と、そのような場所を、班ごとに計画を立てて見学をするという学習をしております。

次に2年生になりますと、次のような体験活動をいたします。一つは「林間学校」に行きます。私の学校は福島県の裏磐梯方面に、これは5月の下旬頃に実施しております。3日間あるのですが、1日目は学級で、2日目はコースごとに別れて登山、あるいはハイキングをするという、そしてこのコース別のものは、クラスを解体します。そして生徒たちは、自分たちがどこに登りたいかというコースを選びまして、登山またはハイキングをするというものです。このコース別登山については、現地の自然指導員の方にご協力をいただいております。そして3日目には「農業体験学習」というものを実施しております。これは喜多方の農協(JA)さんにご協力をいただきまして、12の農家に分かれて、それぞれの農作業を半日間実施するというものです。私のところの我孫子というのもまだまだ農業をしている人もいるのですが、生徒たちは経験が初めてですので、それぞれの農家に分かれて大変貴重な体験をしております。

その後、先ほどお話ししましたが11月から、修学旅行に向けての学習がはじまります。そして2年生の3学期には、「職場体験学習」を行います。最近、「キャリア教育」というものが大変重要視されてきております。私の学校も昨年度から、それまでは1日だけだったのですが、3日間の職場体験学習を実施しております。72の職場に3日間の体験学

習をするということで、この 72 の職場については、先生方あるいは教育委員会にご協力をいただいたり、生徒たちがインターネットで受け入れ先を探したりということで、72 の職場で体験いたします。

これらの体験学習をしながら、そしていよいよ 3 年間の集大成としての修学旅行を、体験学習として位置づけながらやっております。このような活動をうちの学校が始めてから、すでに十数年が経ちます。その間にはいろいろ修学旅行先とか多少変わったところがあった時期もあるのですが、このやり方そのものは、ずっと一貫して通してきております。まず修学旅行を、「自分探しのトラベラー(旅人)を目指して」ということで考えてきました。

その「トラベラー」というのは生徒一人一人が自分の願いをもって、さらにこだわりをもって主体的に行動し、それらを実現するために、自分の力で様々な問題を解決していこうということとして考えております。ですから事前の学習、先ほども提案がありましたけれども、そして修学旅行、そして事後の指導ということで考えております。

はじめに事前指導ということで、私のところでは 3 日間行っているわけですが、1 日目と 2 日目はグループで、3 日目については、今年はクラスごとにコースを作って実施しました。事前学習の生徒一人一人が事前に学習テーマを設定し、学年の先生方が講師になって進めています。「基礎講座」と「専門講座」に分けていますが、この「基礎講座」が大変重要なものになるかと思えます。生徒たちが興味とか動機づけ、要するに広い知識として生徒たちに興味を持たせるような投げかけをいたします。そして、その中から課題とかテーマを見つけるようにさせたいと考えております。この旅行で大変大事なものは、しっかりとした課題意識を持つことだと思っています。知的好奇心を揺さぶるといいますか、そういうことがとても大事だと思えます。その後、自分でそれぞれのテーマが見つめられると、「専門講座」ということで、学習をもっと深く、自分が調べたいものについて調べという「調べ学習」に入っていくこととなります。図書室や市の図書館、または資料を取り寄せるとか、インターネットを駆使して自分のテーマになるものを深く調べ学習をするということとなります。このあたりはもう少し詳しくお話をすればいいのですが、今日は資料を持ってきておりませんので、そこに(配布資料)学習テーマがあります。「金閣寺について」とか「物産・伝統工芸について」、「奈良の仏像について」など。これは大まかなテーマですので、生徒たちの調べるものは、当然もっと細かなものがあります。このあたりを調べてから、いよいよ修学旅行の、先ほどありましたように生徒たちが自主的に参画するという部分になるかと思えますが、自分たちが学習したテーマを設定した生徒同士が、今度はグループ編成をいたします。そして、そのテーマに沿った訪問先をどのように回るかということを計画して、修学旅行に向けて出発します。先ほどお話ししましたように、1 日目 2 日目はグループで回ります。そこには(スクリーン映像資料) 2 日目の「物産・伝統工芸について」を選んだグループのコースがあります。ホテルを出発しまして金閣寺、そして詩仙堂、これは京扇子作りですね。そして西陣会館の見学。これは八ツ橋作りを体験します。そしてホテルということになります。私の学校は、コースの移動については電車そしてバスの日券を買って利用することにしております。そして夜、報告会というものをしています。これはそれぞれがバラバラに違ったコースを歩きますので、自分たちがどういうことをしてきたか、どういうコースでどういった体験をしたかということ報告するものです。これは夜、ホテルで行います。そして、これは年によって違うのですが、

見学の時にガイドをつける年もあります。今年はガイドをつけませんでした。ガイドも、「シニアガイド」または「学生ガイド」と、年によって多少違います。このように2泊3日で実施をします。

その次に、事後学習の方に入ります。行ってきてから、それぞれがテーマごとに沿ってレポート形式でまとめています。時には新聞のような形式でまとめた年もあるようです。そして、文化祭で展示をしたり、または、寸劇やスライドを使ってステージ発表をするというようなことをしております。今年はすでに10月29日に文化祭がありましたので、そこで発表いたしました。また、教科での取り組みということで、先ほど冒頭で紹介いたしました俳句のように、作品として作ってまとめたりするものもあります。

以上のように、生徒たちが調べたことを検証する修学旅行。その中から新たな課題が生まれる。そして事前から事後の学習まで、本当に多くの時間と手間がかかります。しかし、生徒が自分たちの手で創り上げた修学旅行という実感をもつことは確かであります。そして大きな感動も味わうことができました。また、現地の人々とのふれあいも大きな意味を持っているかと思えます。今の生徒たちは社会性に乏しいというようなことがよく指摘されます。人との関わりは思いやりの心を育てるだけではなくて、人としての生き方や学び方を学ぶ大きな機会になっていると思えます。ツアーリスト～団体旅行客から「私のトラベラー」、「旅人」を目指して取り組んでおりますが、まだまだ課題もあります。ほとんどが個人またはグループの活動が中心になりますので、もちろん修学旅行自体もほとんどがグループで行動することが多くなります。ですから、どの生徒も共通して見学する場所がないということもマイナス面かとも思えます。集団と個の活動をバランスよく取り入れるということが、今後、検討されなければならないかと思えます。

最後に、成果と課題という形でまとめたいと思えます。成果としては、(スクリーン映像資料の)一番上にありますように「1年生からの体験の積み重ねがあり、学習が円滑にできた」ということ。生徒たちはこういう学習に慣れていきますので、抵抗なくできるというところがありました。また、「自分たちの修学旅行であったという達成感があった」ように思えます。また、「人との出会いの中から思いやりの心が育っている」ということもあります。

課題としましては、先ほどお話ししましたように、自分たちが調べたところについては分かっているのですが、他の所についてはもちろん分かりませんので、そのあたりをどうするのかという問題があります。それと、個と集団というもののバランスをどのように考えていくのか。あと、生き方の学習としてもっと結びつけていきたいと思うのですが、そのあたりをどうするのかというところも課題になっております。まだまだ言い尽くせないところもありますが、この後のシンポジウムもありますので、そのあたりについてはその場を借りてお話ししたいと思えます。

以上で、報告について終わらせていただきます。ありがとうございました。

「受け入れ側としての修学旅行への期待」

発表者：大津市びわ湖畔「八景館」

代表取締役社長 岸 本 登

皆さん、こんにちは。朝の8時の新幹線に乗って、東京にやってきました。東京～大津間が510kmくらいですけれども、2時間少々で来るという大変すばらしい日本の交通網に感謝をしております。まず、今日このような場を与えていただきました関係各位の方、そして、陰のほうでご尽力をいただいております全修協の山本精五さんには、30年来のお付き合いをさせていただいているのですけれども、そのような方からのお声掛けでこのような場に座らせていただいたことに感謝申し上げます。

それでは、受け入れ施設と申しますか、私もいろいろな地域でのポジションをいただいております、その中からいろいろなお話をさせていただきたいと思っております。本来ですと、このパソコンを使ってやればいいのですが、できるだけたくさんのお話がしたかったもので、直のフリートークでお話をさせていただくことをお許しさせていただきたいと思っております。テーマにもありますように、人間にとって「旅」というのは一体何なのかと。質の高い感動、そして出会い、喜び、人間としての生き方、そして教育旅行そのものが、人間としてどのように成長に関わっていくのかということですね。教育旅行にご参加いただく生徒さんが、体験から一体何を学び、そこから、どのように学んだことを心に刻んでいくのかということ。人間としての成長過程の中で、教育旅行の期間中に体験学習で学んだことが、これから子どもたちが大きくなっていく中で、どこかで糧になるであろうということを願いつつ、我々受け入れ施設側は側面からの協力が必要であると考えております。それが当然、教育旅行の場合、直接に学校からご指名ご予約をいただくわけにはまいりませんので、やはりその中には旅行業者という、日本の旅行業の中のシステムの一つとして、(私どもの場合は、)いろいろな大手の旅行業者さんからのご指名をいただいているというのが現状でございます。そして地域での役割と申しますか、私は旅館業でございますので、宿泊地で人とのふれあい、また、泊りに来られた生徒さんの体験学習の手助けができたらと。宿泊地域の活性化にもなり、当然、立地・環境、そして一番の問題であります、どうしても時間的な制約が教育旅行にはありますので、その少ない時間の中で生徒たちにいかに感動を与えられる体験ができるかということ。人間関係とか環境、そして子どもの心に残る「ほんもの体験」と申しますか。今、「ほんもの体験」ということが叫ばれております。一点、旅館からいえば、旅館があって旅行業者がある。そして旅行業者があって学校がある。学校のほうは当然、保護者と生徒がいる。という、このような関係図が出てくると思うのですが、先ほど司会の方からご紹介をいただいたとおり、私も地域でいろいろと学校の行事にも参加し、またPTAの会長もし、大津市の連合PTAの副会長もさせていただいて、修学旅行に対するものの考え方、当然旅館の考え方は私も十分熟知をしておりますが、旅行社の考え方、学校の先生方の考え方、また、保護者の考え方、必ずしも全てが一致するかどうかとなかなかそうはいかない。保護者の立場から旅行先、どこへ旅行するか、そして宿泊地。どの地域に泊まるのか。そして一番大事な、どういう旅館に泊まるのか、どういうホテルに泊まるのかということが、学校、そして旅行業者の方々には一番の問題と申しますか、ターゲットに置かなければならないところだと思います。私どもの地域の琵琶湖地区

というのは本当に京都に近い地域です。今日はこういう資料を表に置いておきましたので、お持ちの方はパラパラと見ながら聞いていただければありがたいと思います。私どもの旅館は、私鉄電車の京阪を使って約 20 分で京都の三条へ行けるのですが、滋賀県の旅館の場合、教育旅行を受けている旅館がかなり増えてきております。この資料の一番裏に、インターネットのホームページアドレスや住所を全て書いております。それを、お帰りになってご確認いただけたらありがたいと思いますが、規模としてはいろいろな大中小の施設があり、駐車場も大きく広間もあり、お風呂も相当大きく、私どもの場合でいえば、よく宿泊の決まった学校の先生から、「下見に行けないけれどもお風呂の大きさはどれくらいですか？」というお話をいただいた時に、一番分かりやすい言葉で、「小学生だったら泳いでいますよ。」という答え方をいたします。それで日本人ならば理解できるようでして、「ああ、そんなに大きいのですか。」というようなお答えでございます。

話は戻りますが、宿泊の立地。当然、学校さんによって 3 年前からの研究、下地いろいろあってお決めになられているところがありますが、昨今の日本経済の風潮と同じように、入札をなさって一番安いところに落とすというのも、私から言えばいかなものかなという部分がございます。やはり地域によっては、あくまでも旅館の立場から見た目ですのお許しをいただきたいと思いますが、とりあえず安ければいいという、それで旅行社を決める。大体その旅行社さんは、その地域のローカルな旅行社さんがどうも多いようで、現実に何かトラブルがあって、そのローカルな旅行社さんが斡旋した旅館で問題が起こったり、俗にいう「ダブルブッキング」というようなものがあったりとか。当然、それは年に何回か我々も耳にするわけですが、それでたまたま近くの教育旅行の宿泊地から大津へ、私どもが空いていた場合、急遽振り替えになるケースもよくあります。先ほどの緊急危機管理の問題で、急遽、琵琶湖地区へ振られてくる場合もよくあります。来られてから、先生いわく、「なんで、こんな近くにこんないい施設がたくさんあったのに教えてくれなかった？」というのが、答えのようでございます。そして、当然お金の話ですから安いに越したことはない。安くて、内容がよくて。料理がよくて、施設がよくて、添乗員もよくて、全てがよければこれが最高の商品だと思いたしますが、全てがそのように願っておりますが、やはり料金には適正価格というものがあると僕は思います。その適正価格を割ってしまうと、どうしてもどこかで歪みがでてくるのではないかと、このように考えております。ですから決して安かれ悪かれとは言いませんが、やはり安くないものにはそれなりの価値観があるということ、ぜひ覚えていただきたいと思いたします。

話は変わりますが、実は私、青年会議所、俗にいう J C という運動を 40 才までやっております、その中で、滋賀県はご存知のように環境県でございます。琵琶湖のことを、滋賀県では「マザーレイク」と呼んでおります。滋賀県そのものも、自治体が「マザーレイク」というポスターを大々的に県外に貼り出して、琵琶湖の宣伝、滋賀の宣伝をしているのが現状でございます。昭和 55 年ぐらいに、その滋賀県の 12 の青年会議所が寄りまして、いろいろ県に提案をした時期がありまして、その中に私も一員として入っております、今現在、滋賀には俗にいう県営の船ですが「海の子」という船がありまして、これには滋賀県内の小学校 5 年生の子どもが全員乗ります。5 年生の時に 1 泊 2 日でこの船に乗ります、デッキの清掃やいろいろなことをして、宿泊もします。大体 180 名位が乗れる船ですが、琵琶湖で船を降ろしてカッター競技をし、当然、そこで(子どもたちは、)集団

宿泊の経験をもつことになるわけです。近辺の淀川流域からも、この船にぜひ乗りたいという学校がたくさんございまして、今いろいろな方面から、もう1隻その船を使って、県外の小中学生が使えないかということをおの方に提案をしています。1泊はその船を使って、もう1泊は滋賀県内のどこかの宿泊施設に泊まるというのが条件ですよということで、今いろいろな方面から声をかけさせていただいております。それと先ほどのお話の中で、去年台風がございまして、新幹線が相当長い期間止まりました。ちょうどたまたま私どもの方にも、東京都内の学校さんがお泊りになっておりまして、暴風警報が出た時にちょうどその学校さんは奈良でお昼を食べた後、自由行動の時間だったのですが、急遽警報が出ると子どもも自由にさせるわけにはいかないということで、奈良からバスで約1時間ほどの距離ですが、来られてから、さあどうしようということで、旅館で待機ということになったんですが、旅館のほうでも予定も何もないものですから、さあ風呂沸かせやらということでバタバタいたしました。昼間に早くからスケジュールが済んでしまったものですから、最終的に夜の時間が急遽まるまる空きまして、たまたまその学校さんの先生が、下見にお越しになった時に私と環境の話をしたことを思い出されて、「岸本さん、夕飯の後にも子どもに話をしてよ。」ということになりまして、「まあ、別に本職ではないし、適当にしゃべっておけばええか。」ということで、実はお話をさせていただきました。その話というのは琵琶湖の環境についてのお話で、当然、水の大切さ。落とすところとしては、その泊まった地域の、たまたまあれは江戸川区の学校で、横に川があるということを知っていましたので、川のお話などをさせていただいて、いろいろ水の大切さを知ってもらおうと。ただ単に私がしゃべっているだけでは面白くないので、実はクイズ形式で約1時間、広間でお話をさせていただきました。クイズ形式というのはどういうことかということ、例えば東京からお越しになった学校であれば、「琵琶湖の一周の距離はどのくらいあるかご存知か？」という質問からはじめまして、これは(関東の方には、)ピンと来ないですね、皆さん。では、「琵琶湖一周は、東京駅から新幹線ではどのあたりまでになるでしょうか？」ということで、正式には大体、浜松ぐらいまでの距離が琵琶湖一周でございます。それと当然、琵琶湖は海よりも高いところにありますので、「海と琵琶湖の水面のプラスマイナスは大体どのくらいでしょうか？」という。これは子どもに対してのクイズ形式ということで、ワイヤレスマイクを持ちながら広間の中へ入って、皆さんに答えをいただいていくという、そして、より近い答えをした子どもには、ポケットから売店で売れないお土産を無料で差し上げるということで。物をもらって怒る人間もおりませんので。(先ほどの)琵琶湖のプラスマイナスというのは大体、大阪城の天守閣のてっぺんと同じくらいの高さがあります。それと琵琶湖というのは、120本の一級河川が湖にそそいできていて、外に出ているのは瀬田川1本だけなんです。それともう1本、人工水路で平安神宮の前や南禅寺の横にいます「京都疏水」という水路があります。ちょうど私のところは、琵琶湖と京都疏水のすぐそばに建物が位置しているのですが、そういう話も子どもたちにして、この琵琶湖からの水で京都に水が行き、蹴上というところの発電所で電気ができて、京都にはじめて灯(ひ)がついた、市電が走り出した、と。こういう歴史的な話もさせていただいております。それともう一点、関東の方ですと時期によっては水の問題で、水のないときは大変苦しんでいる時期が過去にはあったかと思うのですが、琵琶湖のたった1cmの水の量で、近畿1,400万人の1日分の水道量になります。たった1cmで近畿1,400万人の方々

の水を賄えるというので、こういう、いろいろ子どもたちに分かりやすい説明をして、またクイズ形式にしてお話をさせていただいていきます。この間も実は、熊本の大学付属中学校の生徒さんが150名くらいお泊りをいただいた時も、このお話をさせていただいて、当然、熊本の方に琵琶湖の話聞いていただくわけですから、私も熊本のその学校の歴史とか環境とか、どういう位置にあるのかというようなことを前もってインターネットで勉強して、「熊本に白川という川がある。あなた方、その川はどうですか？きれいですか、汚いですか？」、「目の前にある琵琶湖の水とどう違いますか？」というような問いかけをしています。子どもたちからすれば、まさかそんな自分たちが住んでいるところの川の名前を私が知っているとは思わなかったのか、「おー」というような喜びの声が上がって場が盛り上がりました。私たちもやはり、学習に対して一方的にものをお話しするばかりではなしに、勉強する機会をいただいているというのが一つのプラス要因ですね。それと今、滋賀県のほうにも徐々に教育旅行を受け入れる施設が増えてきております。昔、大分県で「一村一品運動」というのがございました。今、滋賀のほうでは、宿泊施設のことですが、「一施設一体験プログラム運動」ということで、ぜひ宿泊を受ける施設さんは、よそにはない、滋賀にしかない、また自分のところにしかない体験プログラムを作ってくださいということで、一生懸命、県内でお話をさせていただいております。まだまだ滋賀県の場合は、教育旅行受け入れに対して、他の地区と違いまして慣れていない部分がありますので。その慣れていないというのは何かというと、ものの考え方として、お客様をお迎えする時に、下見に来られた先生からよく言われることがあります。「この部屋の掛け軸はなぜ掛けてあるのか？」、「この部屋の花瓶はなんで外さないのか？」と。「いや、たまたま（今日）泊りに来たお客さんが中学生なだけです。昨日は大人の方が泊まりまして、今日と明日は中学生が泊まるという、ただそれだけのことから、先生、なんで外すのでしょうか？」という問いかけを逆にさせていただいて、「どうしても怖いということであれば、おっしゃっていただいたら外します。」ということにしています。滋賀の場合は、施設全体がそういうスタンスでお客様をお迎えしているというのが現状でございます。

今年のテーマで「学びを中核とした教育旅行の創造」とありますけれど、宿泊地といえますか旅館・ホテルはそれに協力をして、旅行会社の企画は参考にされて、今はネット社会ですから、どんどん先生方もいろいろな情報を得られると思いますので、創造は与えられるものではなく、自ら自分で創っていくものが創造だと思いますので、ぜひ、いろいろな情報を駆使して新しい体験とか学習などをお作りいただけたらありがたいと思います。

それと最後になりましたが、私どもも今、職場体験というものを、旅館の中でずっとこの秋に毎日のように、市内8校くらいの学校からリクエストがありまして受けております。大体2日コースと3日コースという子どもたちで、先生方にとりまして、旅館はとても地域の職場体験にはいいらしいんです。何かというと職種が多いんですね。普段は9時半ぐらいから4時ぐらいまでらしいのですが、私どもが受ける条件としまして、「7時50分に来させていただけるのであれば受けましょう」ということで、8時から体験をさせたいと。8時からお客さんのお見送りをさせ、庭掃除をし、お風呂の清掃をし、お茶碗を洗い、ありとあらゆることで1日くたくたになるくらい無料のアルバイトを使っております。来年から、これはある学校の校長先生いわく、女性の校長さんだったのですが、来年から5日間置かせてくれと。「いいんですか？」と。こちら子どもを4人5人預かると必ず一人

スタッフがついて、その人件費で4人分働けたらいいかなという意識はあるのですが、(スタッフが)つかないで危険なことになると困りますので、来年から5日間という学校も増えてくるという話も聞いておりますが、いくつかのプログラムを作って地元の中学生にも体験学習といいますか、職場体験をしていただきたいと考えております。

時間の制約がありますので、拙い話ではありますが、ぜひこの琵琶湖の体験プログラム、「環境共生体験プログラム」等、いろいろ盛りだくさんの内容が入っております。後ろにネットのアドレスがありますので、ぜひまたお暇な時間にピコピコと叩いていただいて、琵琶湖を知っていただいて、徐々に徐々に琵琶湖方面に目を向けていただけたらありがたいと思います。つまらないお話をご静聴ありがとうございます。

シンポジウム「学びを中核とした修学旅行の創造」

コーディネーター：

新井郁男（放送大学教授・埼玉学習センター所長、上越教育大学名誉教授）

パネリスト：

吉田 章（筑波大学大学院教授）

高山利三郎（千葉県我孫子市立湖北台中学校校長）

後藤 太（全日本空輸株式会社東京支店法人販売部文化交流担当部長）

石塚浩哉（近畿日本ツーリスト株式会社東京第1教育旅行支店次長）

新井：それでは、早速でございますがシンポジウムをはじめさせていただきます。シンポジウムのテーマは、「学びを中核とした修学旅行の創造」ということでございます。趣旨等については、お手元にお配りしているプログラムの中にも書かれていることでございます。昨今は学力低下というようなことが危惧されて、大きな問題になっているわけですが、そういった時に修学旅行をどうしたらいいのかと、そのあるべき姿というものも問われているわけでございます。当然、学校の主体性、独自性を活かした創意工夫に満ちた教育活動の展開というのは、修学旅行におきましても求められている、期待されているわけでございます。そのためにも修学旅行において、豊かな活動を通して、質の高い感動を子どもたちが得られるようにして、そして生きる力を育てていくというような、「学びを中核とした修学旅行づくり」ということが大切ではないでしょうかと思います。そういう子どもの人間形成に関わる重要な活動として、修学旅行のこれからのますますの発展ということを願って、このシンポジウムを行うわけでございます。シンポジウムのテーマに、「学びを中核とした修学旅行の創造」ということを掲げております。そういう趣旨でございます。

そしてこのシンポジウムの進め方でございますが、このメインテーマを中心として、サブテーマとして、「教育課程を見直すという中での修学旅行の位置づけ」、特別活動という中に制度上は位置づけられているわけですが、それをこれからどのように考えていくのかということ。それから2番目には、「修学旅行を実施する中で、質の高い感動をどのように組み立てていったらいいのか」。3番目には、「今後、修学旅行の形態、方向などにどのような変化が予想されるのか」。そういったことにどのように対応していったらいいのか。そうした3つのサブテーマを立てまして、それぞれごとにパネリストの方に数分ずつお話をいただいて、フロアの方々から、先ほどのご提案と実践発表もふまえたご質問あるいはご意見をお出しいただいて、討議を深めていきたいと考えております。4人のパネリストの方にお話をお願いしていくわけですが、最初に、筑波大学大学院の教授でおられます吉田先生にお願いをし、2番目に、先ほどお話をいただきました、千葉県の湖北台中学校長の高山先生にお話をうかがいます。そして3番目に、全日空東京支店法人販売部文化交流担当部長をされております後藤様にお話をいただき、最後に、近畿日本ツーリスト株式会社の第一教育旅行支店次長をされている石塚様にお話をいただくという、そういう順序で5～6分ずつお話をいただきます。

最初のテーマは、「教育課程見直しの中で修学旅行の位置づけをどのように考えていくのか」ということですが、そのことにそれほどこだわらずに、メインテーマである「学びを中核とした修学旅行の創造」というところに引きつけてお話をいただければ、というように思っているわけですが。それでは最初に吉田先生、よろしく願いいたします。

吉田：どうも皆さん、こんにちは。改めましてご挨拶申し上げます。先ほどもご紹介をいただきましたが、筑波大学の方に勤務いたします吉田章と申します。今日このような場をお与えいただきまして、大変感謝しております。今日は、学びの主役としての立場から学校の先生方、また、旅行のプロとしての立場で旅行業の方々、そしてまた、場を提供する実際の地元の方々、各方面から皆様方お集まりになっているということで、私もご意見をお伺いするのを楽しみにしておりますので、ひとつよろしく願いいたします。

私は大学の方では、体育の分野で野外運動学を担当しております。野外運動と申しますと、豊かな自然環境を利用し、自然に親しみ、そして自然を理解するための積極的な身体活動というように申しております。まあこれは、たまたま体育の領域に位置づけておりますので、スポーツ性を中心とした野外運動と呼んでおりますが、自然に親しみ、自然を理解するためには、決してスキーをしたり、海で泳いだりということばかりではなく、例えば絵を描く、また、句を愛でる、様々な自然としてのふれあいの仕方があるわけですがね。そのような活動のもつ教育的成果が最近頓に注目されまして、野外教育という呼ばれ方がされることが多くなってまいりました。野外教育という呼び方も大切であります、一番柱となるところの視野を外さず、今後もがんばってまいりたいと思っております。

大きな意味では従来からの林間学校、臨海学校。そういうものを一つの原点とする現代に対応した実践の仕方。そういったことをマネジメントしたり、プランニングをしたりということが中心となっております。それらの一環としまして、昭和 60 年代に各校において実施されました「自然教室推進事業」、あるいは「体験スクール」などということも、我々の一つの対応の形として使ってきております。修学旅行も大きな意味では、そのような校外学習の一つということで、共通するところが多いのではないだろうかと思っております。そういった校外学習というものを考えていきます時に、決してそういう形ばかりだとは申しませんが、いわゆる物見遊山的な旅行行事、あるいは観光見学型にとどまる修学旅行。そういったものに対して、非常に批判的な目をもって従来から見てきたわけであり、とかく主体的な取り組み、そして修学旅行はやはり教育事業として行われるわけありますので、何を学ばせるかという主催者、提供側、教師側の立場と、何を学んだかという参加者としての生徒側の立場、この 2 つを明確に捉えていくこと。これが全て修学旅行の内容あるいは意義を高める上において、外すことのできない 2 つの観点であろうと思っております。たまたま機会となる場であったり、時期であったり、内容はそれぞれ千差万別、多様な展開の仕方があるわけでありまして、それぞれの機会、場面、内容をいかにいきいきと効果的に使っていくかということ。それが一番大切な観点であろうと思っております。

最初のテーマとしまして、「教育課程の見直しの中で、修学旅行をどう捉えて位置づけるのか」ということでもあります。2002 年 4 月から新学習指導要領が施行されたわけです。これにつきましては、96 年の中央教育審議会での「21 世紀を見据えた教育のあり方」と

いうものがベースとなりまして、「生きる力育成のため」という非常に長い文章が発表されており、それについては十分ご存知であろうと思います。そういった中で、かいつまんで大きな柱となっておりますのが、体験的な学習を通して総合的な教育の展開を行うということ、それが大きな一つの柱になるわけです。まさしく、その総合的な学習の場として修学旅行そのものが生きてくるはずであります。そういった中で、一つまだ共通認識がなされていないところ、議論未成熟なところとしまして、総合学習からの発展という形と、総合学習への帰結という、2つの総合学習についての位置づけが考えられると思います。修学旅行という24時間×何泊何日という時間の中には、ありとあらゆる観点からの学習材料が盛り込まれているわけです。それを学習のきっかけとして位置づけていく場合と、あるいは教室で学んできたことの確認、集大成という形で位置づけていく場合において、修学旅行が大きく2つの性格を異にしてくるものではないかというように思っております。

そういった総合的な学習の場として、修学旅行がまだまだ活かされきっていないのではないかということで、すでに私も今日いくつかの問題点を皆様方と議論させていただきたいということで書き上げてきておりますが、また後ほど説明させていただきたいと思っております。

新井：ありがとうございます。それでは続きまして、高山先生、お願いいたします。

高山：私は中学校の現場の代表という形で、ここに登壇させていただいているのだなと思います。私の好きなテレビ番組の中に「田舎に泊ろう」という番組があります。日曜日の7時ごろからの番組で、あまり私も旅の番組は見ないのですが、いろいろ面白いところがあるので、これだけは欠かさないようにしています。あの中でも、人との関わりというのが色濃く出ている番組なのかなと思って大変おもしろく見ているわけですが、郵便番号からその現地に行くというそのあたりのアプローチの仕方も大変おもしろくて、見ております。

それはさておき、私がかつて思い起こすと20年くらい前になりますか、私は元々小学校におりまして、それから中学校に移りました。その時、昭和59年の終わりから60年の初め頃、その中学校は大変大きな中学校でした。一学年12学級とか13学級ということで、全校1,500人。1学年が500人以上いたという大きな学校だったのですが、この学校はその当時、やはり京都、奈良の方に修学旅行に行っておりました。大変大きな学校ですが整然としていて、その修学旅行の内容を振り返りますと、1日目は奈良に（全員で）行っていました。2日目がこれも全員で京都を見学し、3日目だけグループで嵯峨野の散策をするというそのような形で、その当時は大体そのようなものが普通の修学旅行だったと記憶しております。京都というところは全国のたくさんの中学校が集まってくるので、いろいろな学校があるという話を校長先生からも聞かされて、いつもその当時の校長先生は、その学校が大変理路整然と修学旅行をやってきて、ホテルからお褒めの手紙をいただくというようなことを自慢げに話していたのを覚えているのですが、実はその時に文部省の指定を受けて3年間の研究をしておりました。それは「個人差に応じた学習指導」ということで、その当時「個性」とか「個別化」という言葉を私は初めて聞きましたが、そういう研究をしておりました。学習の中でもコースを設定して、選択をさせて勉強するというような学習の指導法といいますか、そのような研究をいたしました。そうしますと子どもたちは、今まで一斉の授業でやっていたよりもまた違った姿を見せてきます。そういう研究

をしていく中で、これは修学旅行にも使えないだろうかという職員の声がありました。私もちょうど担当しておりまして、「なぜ全体で行かなければならないのか?」、「全員で見学しなければいけないのか?」、「やはり、好きなところを見に行くというような修学旅行があってもいいのではないのか?」というのがスタートでした。これは今思えばどうということはないのかもしれないのですが、その当時は大変でした。2日目の京都の見学だけをコースごとに自分たちで調べさせて、自分たちでコースを作ってそのコースで行かせたらどうだろうか、というようなことでした。これは今思えば大変だったなという気がします。

子どもたちがコースを決めながら、旅行会社の人に来ていただきまして、皆それぞれがコースや見学する場所も違いますので、コースごとに費用がいくらかかるとか、時間がどうだとかいうことを全部出して、行ったというような記憶があります。それからもう十数年が経っているわけですが、今、京都に行く団体で歩いている中学校などはほとんどないですね。行っていただくと分かりますが、皆グループになって、バスやタクシーで回り、そういう光景にふれることができます。教育課程の中でこれはもう明確なんですけれども、私の学校では簡単に言うと総合学習と学校行事をリンクさせるという形でやっております。これは当然そのねらいが違います。特別活動(学校行事)のねらい、そして旅行・集団宿泊的行事のねらいというのがあります。指導要領にはこのように書かれています。「平素と異なる生活環境にあって、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活のあり方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと」というのがその内容です。ですから特別活動というのは大きな括りでいうと、望ましい集団活動というものが目指すところです。「総合」というのはここで言うまでもありませんが、今日発表したような部分で、自らが課題を見つけて、自ら学び、自ら考え、具体的に判断し、問題を解決するような資質とか能力を育てるようなものとして位置づけられています。ですから、ねらいとする所は多少重ならない部分があるのですが、そこをうまくリンクさせていく。そして作ろうとやっているのが本校の修学旅行だということが言えます。いろいろ課題についてはありますが、それぞれのねらいを達成できるということを目的としているということです。これが(先ほど)提案したような内容のものになるかと思います。今のところ教育課程の中での位置づけとしては、実際にそのような形で実施しているということです。以上で私の方からは終わりたいと思います。

新井：ありがとうございました。吉田先生は位置づけとして、総合学習を起点として修学旅行を考えていく。また、修学旅行で得たことを総合学習の中に、そしてそれをさらに発展させる、というようにおっしゃったわけですが、高山先生は、総合学習というものと学校行事の集団というものを重要視する。総合学習と学校行事をリンクさせるというような位置づけについてのご提言があったわけでありまして。個と集団ということの問題ではないかと思います。それでは続きまして、後藤様、お願いいたします。

後藤：今ご紹介をいただきました全日空の後藤です。教育関係のご専門の方が数多くいらっしゃる中で、航空会社という少し異なった視点から修学旅行について述べさせていただきますので、いささか場違いなことがあるかもしれませんが、私の考えを述べさせていただきます。

私が修学旅行に関わったのは、1982年、実は営業のセクションにありまして、その当時は公立高校の修学旅行は、やはりほとんど国内の京都奈良に行っておりまして、私立の方

は九州や沖縄に行っておりましたが、どうして同じ 17 歳の秋で、公立と私立によって環境がこんなに違うのだろうかということで、いろいろ条件等を調べて、これをなんとか同じ環境にもっていけないのかということを考えて、公立高校の修学旅行の航空機利用を促進してまいりました。ご存知のとおり、現在では、ある統計によりますと 70%を越す高校が航空機を使用しており、航空機は修学旅行の目的ではなく手段ですが、修学旅行の形態に及ぶほど大きな変化が生じたのではないかと考えております。

ここ数年は、公立中学校の修学旅行での航空機の利用という観点から、勉強をさせていただいております。教育課程の見直しの中での修学旅行の位置づけということですが、私が公立中学校の修学旅行を考えるにあたって、やはり不思議に思うことが、私立の学校がホームページや学校の案内書、こういうものの中で修学旅行あるいは海外研修を含めて、その学校を表現する材料として大きく扱われているのに対して、公立ではそれほどでもないようであるということです。どうしてこういうことになるのだろうかと思います。先ほどの高校生のときと同じように、15 歳の春に同じ教育を受けながら、これほど違う中で修学旅行を体験しているというのはどうしてなのだろうか、ということで、公立中学校について考え始めたわけです。学校経営ということがよく言われておりますが、公立中学校と私立の学校経営はそれぞれどういう観点で行われているのか、ということを考えてみました。

私立は、少なくとも修学旅行や研修旅行は、経営の、いわゆる生徒さんを集める戦略の一つとして使われているように私には思えます。それと私は民間企業に属していますが、民間企業におりますと、どうしても消費者の評価というものが大変気になるわけですが、私立がそういう戦略で修学旅行や研修旅行を表面に出しているのは、やはりこれは生徒を集めるという最大目的の中で、その後に教育がついてくるのかなと。まず集まらなければ教育もないわけですし、そういったところで、生徒や父兄が魅力あると思われるような材料を調べているのではないかと思います。そういう視点で、教育の中からではないですが、航空会社の立場から修学旅行を考えております。それと（教育課程の）見直しということでテーマがあるわけですが、やはり中学校の段階ではリードする側＝指導者の意欲なり好奇心、こういったものが大きく関わってくると思います。昨今、例えば日産のゴーンさんがその経営を劇的に変えたとか、今年はロッテのバレンタインさんがロッテの意識を劇的に変えたとか、中学校においても指導者の役割、リーダーの役割というものが、見直しの中でも大きく関わってくるのではないかと考えています。東京の公立中学校のある先生は、初めて北海道の修学旅行を計画するにあたって、夏休みに自分の費用で修学旅行の下見を全てされたというような意欲的な先生もいらっしゃれば、いくつかお伺いしたのですが、やはり新しいことに対してこだわりをもっている先生方もいらっしゃるといって、公立学校の中で、修学旅行の見直しに対しても大きく意欲、意識のばらつきがあるのではないかと思います。学びというものは、学校教育の学習的な学びがもちろんメインなのでしょうが、航空会社の立場からしますと、2 つの異なる文化、いわゆる異文化の体験を提供し、その橋渡しをするのが航空会社の役割であると思います。自らが生まれ育って親しんだ環境から異なる環境へご案内するということで、そのギャップが大きければ大きいほどその人に与える影響も大きい。また、想像力を働かせる。その想像力の中に学びがあるのではないかと考えております。極端に言いますと、感動の大きさ、想像力の大きさは、旅行する距離に比例する。遠くへ行けば行くほどギャップが大きく、それを埋めようとする

個人の想像力が働く。そういったことで体力的にも知識的にも一定度の成長を経た生徒たちが、これまで周辺の知識、あるいは学習した知識での学習ではなくて、それをふまえた五感で体験する、学ぶという方面に修学旅行を活用されると非常に有効だと思います。修学旅行は中学で終わるわけではなく、やはり高校、いろいろな将来に結ぶ中での一つの最初の大きなギャップへの遭遇といいますか、そのように私は考えますので、そのときに生徒が大きな感動、大きな想像力を働かせるような、そんな学びの場に修学旅行が見直されていけばよろしいのではないかと考えています。

新井：ありがとうございました。今、印象的でありましたのは、公立学校の修学旅行と私立学校の修学旅行の対比ですね。大きく違うのではないかと。私立学校では、いわば経営戦略として修学旅行というものを、一種の学校の目玉として位置づけているというようなお話でございました。公立の場合でも、これからは学校選択ということも地域によっては行われつつありますし、そういう方向というものが、形はいろいろあると思いますが出てくるであろうと思います。そういう中で、公立においても経営戦略というものが大きな課題になってくるであろうと。その中で修学旅行も変わってくるのかなとも思います。

それから、異文化体験ということの重要性をおっしゃいました。「異文化間教育」ということもあるわけですが、総合的な学習というものは、学校で自主的に計画するわけですが、ひとつの例として、「国際理解教育」とか「異文化間教育」というものが言われているわけでございます。そういうことの重要性をご指摘いただいたわけです。

それでは石塚様、よろしく願いいたします。

石塚：近畿日本ツーリストの石塚でございます。入社以来 20 年以上、修学旅行を含む教育旅行一筋に仕事をしております。今回のテーマ「学び」ということについては、私は難しいことはよく分かりません。ただ、修学旅行の現場に常にサポート役として携わっているという立場でございますので、現場の視点からの私の考え、意見を述べさせていただきます。よろしく願いいたします。

最初にサブテーマの一つ目、「教育課程の見直しの中で修学旅行の位置づけをどのように考えるか」ということですが、私は、教育課程は変わっても教育の目的は変わらない、という大前提が必要だと思います。教育課程という手段が変わっても、教育本来の目的は変わらないという視点で考えますと、特別活動の一つであります修学旅行の目的も、しっかり原点に帰って再確認をする必要があるのではないかと考えております。修学旅行の初期の目的は何かと申し上げますと、先ほど高山先生のほうからもございましたけれども、一つには自国の歴史、文化、伝統を学ぶことによって真の国際人を育てる。また、一つには集団的宿泊活動を通して社会性を身につける、あるいは自己理解をする、ということがあるのですが、なぜこの分かりきったことを今言うのかと申しますと、自主性という名の下に、今のような本来の目的が必ずしも達成されていないのではないかと、私は最近の修学旅行を見ていて感じるのです。例えば班別自主研修。先ほどからお話が出ております、生徒が見学したいところを自由に選び、自分たちで見学をする。先ほどの高山先生からのご発表のような形で、しっかりした目的意識をもって実施されていたら話は別ですが、必ずしもそうでない場合もある。どういう現象が起きているかと申しますと、私は東京 23 区の公立学校を対象としておりますので、中学校の 95% が京都、奈良に行っております。おのずと京都、奈良が例となってしまうのですが、例えば、生徒たちが自分たちで法隆寺に行き

ました。入場料を払おうとしましたところ 1,000 円が必要になります。個人では 1,000 円もするんですね。高いんです。中学生にとっては大金です。生徒さんはそこで、「外から見ても見れるじゃないか」と。「五重塔も上がちょっと見えるじゃないか」と。これでいいんじゃないかということで、中に入らずに帰ってくるということが、現実として結構あるのです。これは私が中学、高校時代に徒然草で勉強した「仁和寺にある法師」。まさにあれではないかと思っています。やはり最低限見せるべきところは先生方がしっかり選んで見せる。しっかり勉強させるところは勉強させるところが必要ではないかと思っております。そういう意味で自国の歴史、文化、伝統を学ぶことにより、真の国際人を育てることについては、私どもの視点で取り扱いをさせていただいております例が 2 つあります。今年スタートしました公立の中高一貫校ですが、この学校は英語教育・国際理解に力を入れている学校で、いわゆる 4 年生（高 1）で英語合宿というのをやるそうです。そして 5 年生（高 2）で海外修学旅行を行うというところまでは決まっていたのですが、社会化の先生をはじめとして猛反発が生まれて、自国の歴史文化をしっかり勉強しなければいかんということで、2 年生の 2 学期の 12 月に京都奈良への修学旅行を実施するということが決定しまして、今、内容をどのようにするかということ吟味している最中です。それからもう一つ、これは名前を申し上げてよいと思いますが、都立の国際高校というところがございます。東京の海外修学旅行の試行校に指定されていますので、ここ数年は海外に行っております。ちょうど来週も韓国に出発するのですが、この学校は元々、京都奈良を主体にやっておりました。学校として京都、奈良の 1 泊は必ず外せないということで、さらにもう 1 泊は、学年の担任の先生方で相談して決めるという形でやっておりました。これは一つには帰国子女の生徒さんが多いということ。しっかり日本の文化を勉強しなければいけないということで長い間続いていたのですが、今でも（特に帰国子女の）生徒さんの間で関西への希望が強い、というように聞いております。こういったことで、やはり自国の歴史、文化、伝統をしっかり学ばせるという本来の目的を、しっかり確認する必要があるのではないかと考えております。

余談ではありますが、自主性を重んじるということで、食事のメニューも生徒さんに選ばせるということがあります。事実あった話なのですが、例えば 1 泊目の夕食がすき焼き、2 泊目の夕食がしゃぶしゃぶというようなケースがありました。それはさすがに私も、「先生、それはおそらく選んだ生徒さんも後悔するのではないのでしょうか。」ということで変えていただいたのですが、そういうケースもございます。それから、先ほど申し上げました 2 つ目の集団的活動についてですが、集団的活動とはいうものの見学は班単位、宿舎の部屋割りも班単位、ホテルでは 2~3 人というケースもございます。それから京都、奈良については、広間を持たないために食事を部屋で行うというケースもあります。そうなると学年での行動とかクラスでの行動の機会が全くなく過ごしてしまう。気がついてみれば、仲良し班で 2 泊 3 日すごして帰ってきたということも起こりうる。また実際に起こっております。やはりクラス単位でバスの移動、見学、体験などを共有する時間も私は必要だと思うのです。バス代がもったいないというご意見もございますけれども、班別で動いても公共交通機関（の運賃）をお小遣いから払ったり、見学団体割引も効かない中で、高いお金をお小遣いから出しているということもありますので、見積り額として目に見えない出費もあるということもご理解いただきたいと思っております。やはり繰り返しになりますが、見

学すべきものはしっかり見せて、ある程度、先生方の強制という言葉はいけないのですが、指導という面と全体の行動。これが、私はほかの旅にはない修学旅行というものだと思っておりますので、この原点を私自身もしっかり見て、働きかけていきたいと思っています。以上でございます。

新井：原点に帰ろうというお話であったと思います。自主性という言葉はどう捉えるか。

食べるものを子どもに自由に作らせるところから始めるのか。いろいろなものを目的に応じて作っておいてその中から選ばせるのか。あるいはセットメニューで行くのか。いろいろなことが考えられますが、その辺りのことについての位置づけへの問題提起をいただいたのではないかと思います。それぞれのお立場でのご提言をいただいたわけですが、それぞれのお話を伺ったところで、それぞれの先生へのコメントのようなものがもしございましたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは誠に勝手ですが多少時間が圧しているようにも思いますので、コメントはまとめて最後のところをお願いできればということで、先に進ませていただきます。

それでは2番目の「修学旅行実施の中で、質の高い感動をどのように組み立てていくか」ということに関して、またそれぞれのご発言をいただきたいと思います。最初と同じ順序で、吉田先生お願いいたします。

吉田：質の高い感動ということですが、私は、修学旅行における学びというものを意識した時に、どのような段階として発展するのかということを考えてみました。当然、出会いを求めて旅行に出るわけです。その出会いを経験すれば何かに気づくわけですね。第1段階＝出会い。第2段階＝気づき。そして気づいたものを知識化させようというところに、学校の先生方は努力されていらっしゃるように思います。知識化されただけでよいのだろうかということをお私に考えました。知識というものは、思考の材料となって初めて役立つわけですね。それが今までの学習、あるいは教育の中で深刻に考えてこなかった点ではないだろうかというように大きく反省しております。新井先生のほうから、学力の低下というものが深刻な問題になっているというご指摘がありました。それを受けて、学びというテーマに取り組んでいるわけですが、学習とは何か、学ぶこととは何か。知識を獲得すること。それが学習というものの根本であろうと思います。出会いを経て、気づき、そして知識化したその知識を、次に思考の材料として役立てさせる。そして、ああかなこうかなという疑問意識がそこで当然湧いてくると思うのです。疑問意識が湧いてきましたら、第5の段階としまして、それを自ら検証してみようと。違うところ、異文化というものにふれ、なぜそういうことをするのか、ほかの地域でもそうなのか、自分がやったらどうなるのかということで、いろいろと応用し、実用し、考えて発生した疑問意識を検証する。いろいろ検証したものを次には集約するわけですね。そして一つのものとしてまとめ上げ、修学旅行の発表会のような場で発表をさせるわけです。そしてその過程において成功があれば、これは面白くて仕方がないと思います。面白いことを体験すれば、自らまたもう一度やりたいという発展があって当然ですね。そこにはじめて、自主的・主体的学習が生じるというように思います。自分で好きなことを好き勝手に勉強することが、決して自主的学習ではありません。基礎は基礎、基本は基本。その上でどうダイジェストし、自分の味つけをして発展させていくかということが、初めて自主的な学習、主体的な学習であろうと、このように私は捉えております。

以上のことで7つの段階、もう一度申し上げますと、「出会い」、「気づき」、「知識」、従来はそこまで終わってしまっていたのですが、さらに「思考」、「検証」、「集約」、「発展」という過程までしっかりと段階を踏んで、子どもたちに学びを提供することによって、やりがいのある面白みを感じることで、それこそ感動を得る学習活動ができるのではないかと考えております。

もう一つ、もちろん質の高い感動ということでもあります。単に大相撲を見て感動したというようなことではなくて、質の高い感動とは何か。やはり質の高い材料があることが必要だと思いますが、とはいえ、やはりそこには個人差があると思います。子どもたち＝児童・生徒の学習意欲、モチベーションというものによって、感動の量はまず変わってくると思います。高いモチベーションを持っていれば持っているほど、それに適合する場面の体験、経験は高い感動を得るものだと思います。モチベーションもないのに、いくら素晴らしいものにふれる機会があっても、それはまさに猫に小判という形になってしまうでしょう。まず事前学習としてのモチベーション、それが大切なことだと思います。

あともう一つ、そういった学習意欲というものは多様化しているということですね。この学習意欲の多様化に対する対応があってこそ、適合した感動を得る機会を創出することができると思います。先ほどから話題になっております自主性、主体性ですね。あるいは集団行動、班別行動ですね。全体と個というもの、それがうまく消化しきれていないわけですが、学習内容についても、そういった全体に共通してここだけというコアとなるところ、一つの修学旅行の中でここだけというところは、どうしても教育活動である以上は外してはいけない部分であると思います。それにプラスアルファして、多様な学習内容に対応できるような選択的プログラム、内容、その2つの捉え分け、あるいは設定というものが、質の高い感動を全員に対して、それぞれに得るためには必要な手段であろうというように考えております。

新井：ありがとうございました。学びの構造ということで、意欲や内容の多様化ということへの対応があって初めて全ての子どもに感動を体験させることができるのではないかと、そういうお話だったと思います。それでは高山先生、お願いいたします。

高山：はい、質の高い感動ということで、生徒たちは体験学習をすればそれなりの感動が得られますが、例えば、京扇子を体験学習で作るということであれば、そこに行って作品を作ることによって、それが出来上がったことによる感動というのは当然生まれてくるわけですね。しかし、そういうものの歴史を（事前に）調べて自分で体験するというようなこととはまた違うと思います。もしそこに感動の質というものを問うならば、事前にそういうものの歴史とか、どこでどのようにしてそのようなものがあるのか、そういうものを行うことによって体験をすると、また違うものになっていくと思います。例えば、八つ橋作りもまたそうだと思いますね。どういう歴史的なものがあるのか。どうしてお土産としてそのようなものが売られているのかとか、どのくらいの店があるのかとか、そういうことを調べて、実際に自分で体験することによって感動も変わってくるであろうということですので、そういう調べ学習から実際に体験するという、そういうのも一つ、感動の質の違いを生んでくるのではないかと思います。

先ほど石塚さんのほうからあったのですが、班別行動をしておりますと、どうしても教師として（そこは）見せたいという場所がありますね。例えば奈良の東大寺の大仏は見せ

たいと思います。それはなぜかといいますと、もちろん社会科の教科書にも出てきますし、法隆寺もそうですね。こういうものはやはり見せたいと思うし、それなりの感動もあるし、自分の体験というものも併せながらですが、しかしなかなかそういう所に子どもたちは、先ほどの自分の好きなコースを選ぶといった時に目がいけない。ですから共通に何か経験させるというようなものも必要であると。これは感動の質の問題とはまた別かもしれませんが、グループの活動をすることによって初めて気づくことなのかもしれないですが、そういうものもあっていいのではないかと思います。そういうものを共通の感動として、子どもたちの中に、心のアルバムの中に残すというのも大切なものではないかと思います。

私は土地の人とのふれあいというように、知的なものというより、情意的なものも大切にしたいと思っています。やはり生徒たちにとって京都、奈良に行くということ、修学旅行をするということは非日常なところでの人との接触という、ふれあいというものが大事になってくるし、私が最初のところで紹介した「語り合い涙した夏 糧となる」というような感情というのは、いろいろと苦労した中から生まれてくるもので、苦労ばかりで修学旅行がいいのかというような問題はまた別として、生徒たちにとって重いものを残せることも、私は一つの感動の高いものになっていくのではないかと思います。知識としては頭で理解しても、心で理解するという。そのような体験をさせるきっかけに、この修学旅行はそのような要素をもっているという意味で、質の高い感動を期待できるであろうと思います。また、個と集団の問題は、最後の方のテーマでお話したいと思いますので、以上といたします。

新井：ありがとうございました。事前の調べ学習ということをもとにした体験学習の中から感動というものが生まれるのではないかと。それから非日常的な人と出会う、ふれあうということの中で感動が生まれるのではないかと。それからもう一つは、子どもたちの自主性だけに任せておくと、教師、学校が見せたいあるいは体験させたいということがどうしても抜けてしまうというようなことがあり、その辺りへの配慮が必要ではないかというお話だったと思います。

それでは後藤様、お願いいたします。

後藤：ただいまの高山先生がおっしゃった、非日常という人とのふれあいの中で感動が生まれるチャンスがあるということですが、まさしく私が経験したのは、ある中学校の生徒が北海道の修学旅行に行きまして、たまたま機会があって生徒の修学旅行実施後の感想文を拝見したのですが、その中にあったのは、今まさに高山先生のおっしゃった人とのふれあいということでした。実は、その中学校の生徒さんの一人が北海道で財布を失くしてしまったんですね。また、一人は空港の中で航空券を落としてしまったんです。数少ない生徒さんなんですが、そういうアクシデントが起きて、そういった中で2件ともほどなく拾った方から届けられたと。それだけではないのですが、そういったことを典型として、東京の中でも財布を落として、あんなに簡単にお金が戻ってくるだろうか。ものがそんなにすぐに人に返されるのかと。東京にいますと、今なかなか人が信じられない世の中になっておりますけれども、そういう北海道の人たちの温かさ、優しさ、親切さを身にしみて感じたということ、生徒が作文の中に書いていたわけです。

それと目的地でのこともあるのですが、飛行機が滑走を始めて離陸をした瞬間というのは生徒さんから大きな声上がる。もちろん初めての方もいらっしゃるのですが、日々二

次元の中で生活をしていて、初めて高さのある三次元の世界へということで、体が宙に浮くということですが、この感覚は説明のできないある種の感動といいますか、驚きであり、体験であろうと思います。こういった修学旅行の中での感動のあり方で、知識からくる感動と、ふれあい、体験の中からくる感動があるかと思います。

質の高い感動ということで、横浜のある中学校が修学旅行で九州に行こうということで、先生方が一つのプランを立てて父兄に発表したのですが、例えば阿蘇山を見て、普賢岳の火砕流の悲惨な自然破壊を経験して、熊本では水俣の語り部から環境問題を聞き、長崎に行って原爆の記念館、平和公園で戦争の悲惨さを学ぶというような、2泊3日の中にそういったプログラムを入れていたわけですが、父兄のほうから質問があったのは、「せっかく修学旅行に行くのに子どもたちは暗くなって帰ってくるのではないですか？」と。要するに知識、理解といったものは詰め込まれているのですが、せっかく中学校で唯一の修学旅行の機会に、少し重すぎるのではないかというようなご意見が出ました。非常に先生方も真面目に取り組まれて、本当に豊富な内容にされて、質の高いものを目指されたと思うのですが、一方でそのような話もあるということで、必ずしも物、場所そういうものだけではなくて、先ほど高山先生がおっしゃったように人とのふれあい、環境の違い、こういったことに生徒さんが感動するところもあるのではないかと思います。特に首都圏に住んでいますと、お父さんというのは大体サラリーマンで、商店の方もいらっしゃるでしょうが、大体が均一の社会の中で首都圏の方は暮らしているのではないかと思います。ですから、どうしてもいい成績を取って、いい学校に行って、いい会社に入って、サラリーマンの中でうまくやっていこうと、そういう価値観が生徒の中に芽生えるのではないかとも思います。そういった中で地方に行きますと、農村あり、漁村あり、いろいろな職業があって、そうやって暮らしている人たちに出会う。そこで今までの日常と、中学校まで暮らしていた社会と大きく異なる社会があるのだなということを経験する。こういった中にも大きな経験、感動があるのではないかと考えております。そういった一つの社会の価値観から、多様な価値観の中に身を置くことによって、それが中学校からさらに成長した段階で自分の生活の中に活かしていく。旅行の中で体験したことを社会観として、次のステップの中で活かしていく。そういった感動が修学旅行の中で生まれれば、大変価値があるのではないかと、あるいは有効なのではないかと考えます。

新井：ありがとうございました。あれもこれもとプログラムを盛りだくさんにすることによって質が薄まってしまって、感動も薄まってしまわないかというようなお話。

それから、財布などの失くしたものが戻ってきたことの感動というようなお話もございましたが、私も似たような体験が高校時代にございまして、旅行中に列車の窓から顔を出してしましたら帽子が飛んでしまいまして、それが、翌日学校に戻ってきたんですね。それはいまだに時々思い出して、世の中捨てたものではないというような信頼感が強まったという記憶がございます。

それでは最後になりましたが石塚様、よろしく願いいたします。

石塚：質の高い感動ということで、質の高いとつきますと非常に難しくなってしまうのですが、先ほど申し上げましたように、東京の中学生は関西が多いものですから、一緒に行ってみてどんなことに感動しているかといいますと、単純なんですね。「奈良の大仏は大きかったよ。」「金閣寺すごくきれいだったよ。でもお金かかっていそうだね。」と。「教科

書の写真で見た百済観音とか玉虫厨子の本物が見られた。」というようなレベルが多いですね。事前学習をしたとしても、それぐらいで十分かなと私なりには思っています。きっかけづくりになればいいのではないかと思います。これが都立高校で飛行機を使う学校のほかに、まだまだ根強く関西に行っている学校が、私どものほうでも年間5校ほどございますけれども、2年後の高校2年生になりますと、また、ぐっと見方が違って来るんですね。言い方が失礼になってしまうかもしれませんが、これは生徒さんのレベルもあるのかもしれませんが、同じものを見ても見方が変わってですね、もう一度自分は卒業してから個人的に来てみたいというようなことがあります。本当にこれは読書と同じで、その年代年代での感じ方がずいぶん違うのだなということもあって、これが私は学びの一つなのかな、感動の一つなのかなというように思っています。

もう一つ、感動のためには、やはり楽しくなくてはならないと思います。修学旅行目的の一つに思い出づくりというものもありますし、基本的に旅行というものは楽しいものであるべきだと思うんですね。そうした場合、生徒にとっては、行き先はあまり関係ないのではないかと。何が一番楽しいかという、見ておきますと、宿舎内で友達とすごしている時間が一番楽しそうですね。そういう意味では宿舎内ではあまり行事を詰め込まずに、実はこれは20年くらい前に校内暴力等で荒れた時に、宿舎内にずっと閉じ込めておく、何をしでかすか分からないので、少しガス抜きに外に連れて行かなくては、というような考えがあったり、旅行会社のほうでもそうした方が利益が出るというような思いもあって行ったケースもあるんですが、今は必ずしもそういう学校の状況ではない、ということもあります。せめて一晩ぐらいは、ゆっくり友達と過ごす時間も必要ではないかと思います。特にまた中学生ですので、いわゆる男女間の部屋の行き来は禁止すると、それはそれで仕方のない面もあるのですが、そうした場合にロビーであるとか、ちょっとした広間であるとか、そういうところで交流の場を作ってあげるとか、そういう時間帯も必要ではないかと思っています。そして私どもは何かできるかといいますと、やはり楽しく明るい雰囲気づくりといいますが、添乗員とか宿舎で働く方々ですとかバスの乗務員さんとか、苦虫噛み潰したような顔をしていないで笑顔で仕事をしましょうと。生徒さんに対してはしっかり一人一人にというわけにはいかないかもしれませんが、挨拶をして、声をかけて、楽しく明るい雰囲気づくりをしていこうではないかということを中心にしていきたいと思っています。以上でございます。

新井：先ほど、後藤様からは、あれもこれもプログラムを詰め込むのはどうかというようなお話でございましたが、今の石塚様のお話では、集団宿泊体験というものの宿泊の時にも、プログラムもあまり詰め込まないほうがよいということであったと思いますが、ここでまたそれぞれご意見をお出しいただいてもと思いますが、全部終わったところでフロアの方々からもご意見をいただいて、最後にまたお話をいただくという形で進めさせていただきたいと思います。

最後は、「今後、修学旅行の形態、方向などにどのような変化が想定されるか」ということ。またどのように変わっていったらよいのかというようなことで、もうすでにいろいろと、これまでのところでもご提言をいただいておりますが、まとめとして、どのような変化が想定されるかということについて、改めておうかがいしたいと思います。

では最初に吉田先生、お願いいたします。

吉田：今後の将来的な修学旅行の形態、あり方ではありますが、おそらく多様な形で発展すると同時に後退もしていくと思います。すでに学校の中には、修学旅行に対して否定的な見方、時間が取れない、内容がそれほど成果が上がらないということで否定的に捉えていらっしゃる場所もあるやに聞いております。この方向だけはなんとか阻止しなければいけないと思っているわけですが、

かなり古い話で恐縮ですけれども、これは 10 年以上も前に朝日新聞の天声人語に載っていたことです。アメリカで、ワシントン、ニューヨーク、要するに国のシンボルとなる都市ですね。これを見ずしてこの世を去っていく方々が半数近くあると。ところが、わが国において東京、京都、そういった所を見ずしてなくなっていく方々はほとんどないと。その違いは何かといいますと、もちろん国土の大きさの違いもあるでしょうが、修学旅行という制度のあるか無いか、そこには大きく関与しているはずだという論説がありました。そういったことでも修学旅行が及ぼす効果は大きなものがあると思っています。ただ、その修学旅行の進め方、内容において、まだまだ検討を要するところがあるがために、否定的な見方といったものも出てくるのではないかと思います。

これも大変古い話で恐縮であります、オオヤテルコさんという評論家がおいででした。もう 20 年以上も前、1960 年代にわが国の海外旅行が一般化したという動きを捉えまして、パック旅行の普及によって、多くの方々が海外旅行に行かれるようになったけれども、あれは海外旅行ではないとはっきり打ち消されましたね。それは何かというと、まるで大きなアクリルキューブの中に入って、大きなクレーンでぐるっと回されてきただけの旅行にしかすぎない、と。旅行とはなんぞやということですね。景色を見るだけではない。景色を見るだけでしたら、今の時代はハイビジョンで見ればもっときれいに見えるわけですね。

例えばアルプス、スイスなどに出かけて「あれがマッターホルンでございます」と。大体、十中八、九、雲がかかっていて見えないそうですね。ということで、本当に景色を見るためでしたら、他の方法のほうが詳しく美しく見るのが可能である。何のためにわざわざ行くのかというと、その土地の文化を知り、人々にふれ、匂いを嗅ぎにわざわざ旅行に行くのであると。ところがアクリルキューブの中に入ったままでは、そんな文化にふれたり、人の温かさを感じたり、匂いを嗅ぐことなどは一切できないということをはっきりおっしゃっておられますね。観光バスに乗って、「はい、右は...ですよ。左をご覧ください。」というような車窓見学などという言葉もありますが、まるでその形だけで旅行をしてくるような旅行の仕方があってはいけない、ということが言えるかと思います。

そのように、現時点で問題とすべきことはたくさんあるわけですが、それらを改善しつつ、これからの修学旅行で考えねばいけないこと。あるいは修学旅行であることの必要性について大きく 3 つにまとめました。一つは、団体であることの必要性。やはり個人、個性の時代、主体性、自主性といって、学校を出発する時からグループ形態の修学旅行というのでは、これは修学旅行にならないと思いますね。やはり団体であることの必要性。その一つは、効率性、経済性の観点からも団体であることのメリットというものは大きく出てくるわけですし、特に最近の児童、生徒、そしてこれからの青少年にとって、社会性育成の場としての集団行動のもつ意味には非常に大きな意味があるものと思います。

個人で行くこととは違う、やはり全員で行く形態がもつ大きな良さ。それをますます強調していくことは大事なことだと思います。

二つ目に、非日常であることの必要性。手間隙お金をかけてわざわざ遠い所まで出かけていくわけですね。この非日常性というのは、先ほどからたびたび言葉として挙がっておりますが、価値を高め、そして感動を生むためにはやはり必要なことです。毎日の生活の中でも、非日常を見つけようと思えば不可能ではありませんが、やはりそれを全てあらゆる観点から非日常であることの設定ができること。これが価値を高め、感動を大きくする上で大事なことだと思います。せっかくの非日常であるわけですから、その場その機会ならではということを経験に重要視していただきたいですね。一つのケースですが、自然体験型修学旅行が非常に普及された時期です。ちょうど私、長野の白馬にありました。梓川の非常に広い、きれいに整備された河原で、某高校の修学旅行がソフトボールのクラスマッチを始めておりました。わざわざここまで来てソフトボールのクラスマッチをすることはないでしょう、という思いで見えてまいったわけですが、やはりその場ならではということを経験に最優先にするということが、非日常であることの価値を高める上で一番大事なことになるかと思えます。

三つ目に、教育的配慮がなされていることの必要性。やはり修学旅行でありますから、何を学ぶか、何を学ばせるか、そして全てにおいて成果を高めるかという教育的配慮が、常にあらゆる観点からなされていることの必要性。形の上で何泊何日どこへ行きました、何を見ましたという形態だけでの整備だけでは修学旅行といえないと思います。この3つを、修学旅行を考えるときの必要性という形で提言させていただきます。

新井：ありがとうございました。団体の重要性、必要性ということ。非日常性の重要性、教育的配慮の重要性というような3つの方向でおまとめをいただきました。戦後の教育改革の中で、経験ということが非常に重要視される中、「這い回る経験主義」ということで非常に問題になったことがあるわけですね。方向がはっきりしないで、ただただ経験をしているだけではどこに行き着くか分からないというので、「這い回る経験主義」という言葉があったわけですが、そういうことに対して、もう少し教育的配慮が重要ではないかというお話だったと思います。それでは高山先生、お願いいたします。

高山：今、吉田先生がうまくまとめていただいたものですから、それに尽きるかなという感じもするのですが、先生が最初、修学旅行が発展的で、そして帰結という両面をもっているということをおっしゃったと思います。私もまさにそうであると思っております。やはり、修学旅行も学習なんですね。ですから、もちろんねらいをもって実施されるものですので、そこまでの過程、そして当然行くことによって新たに生まれてくるものもあるはずなんです。私は修学旅行のもっている一つの側面というのは、行くことによってそれを検証してくる、そして次に新しい課題を見つけるという、そのような一つの間であるというように思いますし、また、今度は違う自分のテーマで来てみたいという思いを起こさせてあげることなのかなと思ってます。

私の昨年行った修学旅行にこういう子がいました。この子は修学旅行の前に足を骨折しまして、行くか行かないかということになりましたら、自分は松葉杖をついても行きたいと。やはり班で行きますので班の子どもたちも、車椅子を押してもいいから一緒に行きたいということで、松葉杖を持参して、ホテルで車椅子を用意してくれまして、修学旅行に行ったという子がいました。この子やこのグループにとって、修学旅行とは本当に一生忘れない、私たちからすると、あの清水寺の坂をどういう風にしたのかなというようなこと

を考えるだけでも、大変だっただろうなという気がするのですが、そういうことにもめげず、バスとか電車とかを使って行って来たということで、この子どもグループも、修学旅行が忘れられないものになったのではないかと、そういうことをふと思い出しました。

私も今までの発言の中で何度かお話をしたかと思いますが、今回も吉田先生から、団体であることの必要性ということをおっしゃっていただきました。学校でもグループの学習がいいといいますが、全てをグループの学習でやろうというような傾向があります。一つのバランスを考えればいいのですが、特に学校の先生方というのはそのように何でもそれでやってしまおうと。最近、よその学校の授業などを見せてもらおうと、グループでやるということが大変多いですね。一斉の授業というものがあまり見られないような、普段はやっているのですが、そういうことが多いようです。しかしやはり一斉の授業というのも、効率性とか、日本で長く培われてきたものというのは大事なものがあるわけですね。修学旅行もそういうことと同じように、全体で回って、効率よくたくさん見るということも必要であろうと思います。先ほどもお話ししたように、この時期の子どもたちにこういうものを見せたいという、そのような教師の思いとか教育的な価値というものがあると思いますから、そういうものについては、せっかくお金をかけて行くわけですから、実際に自分の目で奈良の大仏を見るとき、そういう体験はぜひともさせたいと思います。

一方では、目的をもって自分たちで調べて、自分の眼で検証するという学習も必要であると思います。そういうものをうまく取り入れた修学旅行というものが企画されてよいのではないかと思います。集団、グループ、あるいは学年で行くというものがあってもいい。

修学旅行を企画する時に、そういうものをうまく考えながら、また年によっては子どもたちの実態というようなものもあります。このような授業というのは一つの学習ですので、子どもたちの実態というものをふまえて立てるということを疎かにしてはいけないと思います。時には、中学校というものはいろいろな問題を抱えます。グループで行かせるのは少し心配だなということもあると思いますし、集団、全体で動いたほうがいいと思う時もありますので、そういったことも十分に考慮しながら、個と集団というものをうまく使い分けながらやっていくことが必要かなと思います。

「学びを中核とした修学旅行の創造」ということですので、そういうことを通して、生徒たちがたくさんのことを学んできて、私が最初に紹介した俳句の中にも、「夏の夜 夢の中でも修学旅行」というような、多分これは、修学旅行が嫌だから夢に出てきたのではないと思います。そういう楽しい部分も持っていなければいけないし、また来たいなというような期待感、高校生やさらに大きくなってから来たいというような気持ちを起こさせるような修学旅行にしていかなければいけないと思っております。たくさん課題があるようですが、子どもにとってみれば一生に1回の中学校の修学旅行ですから、そういったことも学校では十分に考えながら、いい思い出づくりをさせてあげたいという考えでございます。以上です。

新井：高山先生には、吉田先生が言われた3つの原則というものを具体的にどのように考えていったらいいかというようなことについてのお話をいただきました。中学校2年生、3年生といっても、年によってその実態は変わっていく。その年による違いもふまえていく必要があるであろうということも大変重要なポイントではないかと思いました。それで

は続きまして、後藤様、お願いいたします。

後藤：今後、修学旅行の形態、方向について、どのような変化が想定されるかということですが、教育の現場にいないわけですから、生徒の観点が欠けていることをご了解いただきたいと思いますが、

私が今後の修学旅行に対して期待するものは、まず中学生の段階で国内の異文化を体験する。自分の周囲だけではなく、日本がいかに多様かということも中学生の段階で知ること。知識だけではなく五感で体験する。一定度の体力と一定度の知識を持った段階で体験するという。と申しますのは、私も親ですが、大体 10 歳から 16 歳ぐらいというのは非常に人間の成長過程において吸収力がある、あるいは伸びるという時期にあるのではないかと個人的にも思うわけですが、その 15、16 歳ぐらいの段階で、日本がいかに多様であるかということも、修学旅行を通じて、もちろん先ほど吉田先生、高山先生がおっしゃったように、集団ですごす修学旅行の意義、そういうものを前提とするわけですが、中学の段階で、そのような身の回りだけではなく、日本が多様であるということも修学旅行を通じて経験する。その次に、中学校の修学旅行が終わりではなく、高校の段階で海外の修学旅行を経験して、これまで日本国内で見聞きしたことがほかの人たちはどのように考えているのか、そこには大きな相違があるでしょうし、共感できる部分もあると思いますが、そういうものを肌で感じてほしい。中学校の修学旅行のその次のステップに高校の修学旅行があるという、その前段階として捉えられないかと思っています。例えば、年間 10 万人の高校生が中国、韓国に行く。最近では海外からも日本に来ておりますので、韓国、中国から年間 10 万人の修学旅行がやって来る。そうしますと 10 年もしますと、数百万人の若者たちがお互いに漠然とした知識ではなくて、具体的な A さん B さん、中国にはこういう子がいた、韓国からはこういう子が来た、あるいは日本人にこういう子がいた。そういったものを知識ではなくて、体感としてそれぞれの若者たちが持つようにならないか。

教育の現場にはおりませんし、僭越かと思いますが、航空会社の中で、修学旅行を通じてそのような世の中にならないかということも思っております。修学旅行は重要で、私は当然、今後も続くという前提で申し上げていたのですが、吉田先生によりますと否定的な方もいらっしゃるということでもいささか驚いたのですが、ぜひ国内、国際につながる修学旅行になってほしいと思っています。

もう一つは、冒頭に申し上げましたように、修学旅行の評価というものがもう少しなされてくるのではないかと。東京都においても、学生がいなくなったりとか、公立においても学校間の競争、生徒をいかに魅力的な学校に引き寄せるかといったことが、公立の中でも急速に広がっていくと思います。そういった中で修学旅行というものが、先ほどの私立の話ではないですが、評価の対象になるのではないかと。例えば、東京で初めて飛行機に乗った品川区の中学校ですが、私が最初にお会いしたときには、1 学年の生徒数が 87 名でした。そこが翌年には 108 名になり、次に 130 名、今年の新入生は 166 名と、わずかの間に生徒数が倍になっているということです。もちろん校長先生をはじめ先生方のいろいろな努力の中で生じたことですが、校長先生がおっしゃるには、こういった新しい航空機での取り組み、これが父兄に評価されているのは間違いのないようにおっしゃっていただきました。航空機に乗ることだけではないのですが、新しいことにチャレンジをして、修学旅行がその評価の対象になる、そういったことが今後生じてくるのではないかと。

もう一つは地域間の交流。修学旅行が現地に行って、(先ほどおっしゃっていただきましたが、)現地の景色だけを見るということではなくて、現地の人たちとの交流。それは相互交流ということで、例えば東京から地方に行って、そこで見学だけでなくいろいろな交流活動を行う。それがあるいは地方からあるときに東京に来て、あるいは地元に来てというようなお互いの相互交流を始める。1年生で入ったときからインターネットで事前の情報交換などをしながら、集大成として修学旅行の中で実際の交流を行う、といったようなものが出てくるのではないかと思います。沖縄に行った公立中学校では、事前学習として体育館で「エイサー」、「沖縄民謡」といったようなものを修学旅行の前にやっているわけです。要するに、わずか2泊3日の中だけでは終わらない、事前の交流あるいは事後の交流といった地域交流というものが修学旅行の中で生まれてくると、さらに生徒の視野が広がるのではないかと考えておりました、ぜひ、そうあってほしいという期待を込めまして、今後の修学旅行について申し上げます。

新井：いろいろ重要なことをご提言いただきましたが、先ほど、吉田先生は学びの構造ということでの発展ということをおっしゃいましたが、その発展にもいろいろな面があるかと思いますが、中学校の修学旅行で学んだことが高校に発展していくというような、学校間の発展ということもあるのではないだろうか。そして高校の場合には、経営戦略として修学旅行を位置づけているというようなことも、当然、今後は重要になってくるのではないかと思うわけでございます。今、学校評価、自己評価とか学区内評価ということが大きな課題になっておりますが、修学旅行もその評価の重要な対象になってくるのではないかというお話であったと思います。ありがとうございます。それでは石塚様、よろしくお願いたします。

石塚：修学旅行の形態、方向などにどのような変化が想定されるかということで、旅行会社の目からですが、今回もいろいろな自治体さんからご参加をいただいていると思いますが、それぞれの自治体さんがいろいろ熱心に修学旅行に向けてご提案してくださっているので、おそらく方面も多様化していくであろうと思っています。学校にとって有意義な修学旅行ができて、さらにその地域が経済的な面だけではなく活性化してくれれば、旅行会社としては非常に喜ばしいことだと思っています。例えば東京も、先ほどから関西を例に出していますが、グリーンツーリズムの一環で東北の民家に、いわゆる民泊、分宿をしまして、農作業体験をするという形態の修学旅行も出てきています。これは先ほどの高山先生の学校のように、別の学年で林間学校というような行事があればまた別ですが、今は週5日制で行事の削減という動きがある中で、林間学校といったようなものがなくなっているというケースもあります。それを併せた形で、修学旅行に農作業体験を取り入れるという動きもあります。

また先ほど、後藤部長がおっしゃったように、航空機利用によって、私どもも今年、東京都内の公立中学校を2校、沖縄の修学旅行ということで取り扱いをいたしました。平成19年に向けては、九州方面を検討されている学校さんもございます。今まで行きたくても遠くて行けなかったというところが、行き先として可能になるということで、航空機は有効であると思います。昨年も花巻空港から、今まで北海道にしか行けなかったところを関西方面まで飛行機で出かけられるようになったというようなことも聞いております。今後、航空機の利用などを考えられている先生もいらっしゃると思いますので、私どもは都立高

校の航空機利用の修学旅行の取り扱いもやっているのですが、必ず聞かれますのが、欠航になった場合どうするのかというご質問があるわけです。もう後藤部長さんは百もご承知のお話ですが、私ども旅行会社としてはおそらくとしか言えないですが、学生さんについては学校行事ということで優先的にやって下さる、というような答え方をしているのですが、おそらくこういったことが今後、質問の中に出てくるのではないかと考えております。

しかし首都圏についていうと、やはり関西に JR で 2 時間半で行けてしまうというのがありますし、修学旅行の本来の目的であるところの要素が多いということで、なかなか京都、奈良は外せないという動きも大きいです。これは沖縄のある新聞社などでは、前例を踏襲しているだけではないかというような批判がありましたけれども、それは当たらないと思っています。学校の先生方からは関西を外せない、しかしながらプラスアルファで、林間学校もなくなったし、なにかしら自然体験的なものを取り入れる旅行はないのかという要望をいろいろと受けているところです。例えば私どもの支店では、京都、奈良プラス伊勢志摩地区の海の体験をしたりとか、そのようなものも提言して、これからほかの部分もいろいろ勉強しなければならないと思っています。ちょっとまとめませんけれども、以上でございます。

新井：いろいろな緊急の事態への対応という問題であります。最初のところで、民家に泊まるホームステイのようなものもございましたが、これからの方向ということで停滞というようなこともあるけれども、なんとかしてそれを食い止めて、重要な修学旅行というものを発展させていくためにはどうしたらいいかということで、いろいろなご提言をいただいたわけでございます。

これからフロアの方々からご意見を頂戴したいと思います、その前に 3 つの柱についてそれぞれご提言をいただいたわけですが、もし何か補足やいい忘れたことなどがございましたらお願いしたいと思います、ございますでしょうか。よろしいでしょうか。特にありませんようでしたら、しばらくフロアの方にご発言をいただきたいと思います。一つ一つのご質問にお答えをいただいておりますと時間もなくなるとしますので、いくつか時間の許す限りご発言をいただいて、それを 4 人のパネリストの方々にお聞きをいただき、最後にそれについてのお答えも含めてお話をいただくという形にさせていただきたいと思います。ご発言をいただく時に、お差し支えなければ、お名前と所属などをおっしゃっていただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

質問(1): 千葉県野田からまいりました廣間です。パネリストの皆さんのお話を聞いて、修学旅行ということについて、実は初めてこれほど考えさせられました。今年も私どもの学校は 2 泊 3 日で京都、奈良の方に行ってきたのですが、大体例年どおり班別行動で、2 日間とも今年は班別行動で行ったわけですが、それほど新しい修学旅行にしようというようなことはあまり考えずにやっておりました。今のお話を聞いておまして、やはり考えなければいけないなということをつくづく感じさせられました。実は修学旅行の費用についてですが、先ほど公立と私立というお話があったと思いますが、私の中学校の場合には、1 年生の 4 月から月 5 千円を集金ということで、それが大体 22 回ぐらいということになります。3 年生になって 1 ヶ月から 2 ヶ月ぐらい集めますので、そうしますと 11 万 ~ 12 万円ということで、まず 1 年生で 1 日の校外学習、2 年生で 2 泊 3 日の林間学校、3 年

生で2泊3日の修学旅行と、11万ぐらいを(費用を)割り振るわけです。大体、1年生の校外学習で5千円程度、2年生の林間学校で4万円程度、残ったものを修学旅行にということで、例年同じような金額でやっています。今日お聞きしたいことの一つは、林間学校と先ほどの体験的な形での修学旅行に流れが動いている傾向もありますが、その林間学校と修学旅行の線引きが私の中であまりないのですね。林間学校のほうは、近くで私のところだと那須あたりへ行きますが、そこでの体験学習、ペンションとか民宿の方でいろいろなことを教わったりする。修学旅行では一切そういうものがないのです。修学旅行ではほとんど見学という形で、私はそれでもいいのかなと思っているのですが、林間学校と修学旅行のここが違うというところがありましたら、お話をいただければありがたいと思います。以上です。

新井：費用の問題と、林間学校と修学旅行の違いといいますが、そこにどのような線引きをしたらいいかというようなご質問だったと思いますが、他にございませんでしょうか。

質問(2)：神奈川の相模原市立緑が丘中学校の遠藤と申します。本校では約10年間、平泉の方で民泊、農業体験、2日目がホテルに泊まって3日間で実施をしているわけです。最初は京都、奈良に行っていたのですが、すごく荒れた学校だったということもあってお断りがきたということで平泉の方に行ったのですが、最初生徒たちが入学した頃は、「よその学校はいいな」、「京都、奈良に行けるのか」と。うちの学校は先輩たちが悪いことをしたから京都、奈良に行けなくなったというようなことを言っていたのですが、私も5年前に今の学校に赴任したときには、京都、奈良に行けばいいのにと考えたのですが、実際に平泉の方へ行って民泊しますと、帰ってきた時に子どもたちが平泉でよかったと、京都、奈良はいつでも行けるからという声大きいですね。ということで、本校は今年平泉へ11年目で、優先的に農家にお泊めいただいているのですが、最近困ったことに、農家の方でも対応できないという声が挙がって来ました。町役場の方が窓口として斡旋してくれていたのですが、町役場の方でも最初にやっていただいた方が変わってしまっていて、そうするととても対応できなくなってくるということで、本校も再来年以降、平泉の農家に泊まるということが大変難しくなってきました。農家に泊まるというのは、我々職員にとっても本当にいい修学旅行なんです。もっと続けたいのですが、それが難しくなっている。

それでは果たして業者の方で、そういう農家を開拓できるのか。いろいろ会社の方では民宿ではどうでしょうか、などと言われるのですが、やはり、個人の農家のほうが人情的な面からもいいわけですね。ということで、もしそういう開拓が会社の方でできるのであれば嬉しく思います。以上です。

新井：民泊、民宿での体験ということでございます。他にございますでしょうか。

今のお二人のご発言をふまえながら、最後に4人の方々にまとめのご発言を頂戴したいと思います。今度は順序を逆に、石塚様の方からご発言をいただければと思います。

石塚：最初の林間学校と修学旅行の線引きというものについては、定義は私にも分かりません。一般的には林間学校については、当たり前ですが自然体験。先ほどご発表がありました、ハイキングであり、農作業体験であり、そのようなものを含めた旅行であり、修学旅行については、先生からおっしゃっていただきましたが、見学だけではありませんが、見学主体の旅行という程度のイメージしか私にはございません。定義があるのかど

うか分からないのですが、それぐらいしかお答えできないような状況です。

それから遠藤先生のご質問ですが、これは東京都内でも同じようなご質問を受けております。やはり農家の方々も専業農家というのが今は少ないものですから、どうしても日中は家を空けてしまうということで、最初は受け入れとしては熱心にやったださるのですが、人の家の子を預かるというのは相当大変だと思います。これは例えば、宿泊を生業としている旅館や民宿であれば問題もないのですが、農家が宿泊を受け入れるということになると、言ってみれば寝具とか茶碗とか、大家族ですので日頃から準備はあるとは思いますが、なかなか親戚の子を預かるようにはいかないということで、だんだん受け入れも先細りになっているというのが現状です。私ども旅行会社が開拓できるかということ、どうにもならないことなのですが、今回いらしている自治体の方々と協議をしながら、場合によっては学校さんの要望を三者で聞きながらやっていくしかないのではないかと考えております。お答えにならないのですが、結論から申しますと私どもだけの力ではどうにもならないと。やはり自治体の方々、グリーンツーリズムに対して熱心な自治体もかなり出てきておりますので、その方々と協議しながらやっていくということになるかと思えます。以上でございます。

新井：それでは後藤様、お願いいたします。

後藤：林間学校と修学旅行の線引き、私も同じ門外漢でありますけれども、旅行ということで考えますと、松下幸之助さんが、旅行というのは総じて遠くへ行けば行くほど魅力を高める。人間はそういう心理を持っているというようなことをおっしゃっていました。

要するに遠くに行ったほうが自慢できるわけですね。近くの日帰りで行くところもあるので、やはり見も知らぬ遠いところへ行った方が旅行の価値がどうも高いようで、旅行に自慢をするのは、何か遠くへ行ったほうがいいことをした、偉いことをしたような心理があるようですので、林間学校というのは、遠くへ行くというよりはその場で何をやるかということだと思います。私の個人的な感想でいえば、林間学校は「経験」、修学旅行は「旅行」ではないかと思えますので、ぜひ遠くに行くことを評価の対象にしたらいかがかなと思います。

それと横浜市の私立中学校が19年度から飛行機を使って九州に行くのですが、大体3学年の間の旅行をとまなう行事で、やはり10万円くらいとおっしゃっていました。主なものは2年生の自然教室で4万円程度、修学旅行で6万円程度ということなんですけれども、横浜市も自然教室に対する助成金がだんだん減ってきて、最後には無くなる計画であるということで、2泊3日で自然教室をしているけれども、助成も無くなって続けることはできないということで、トータル3年間の中で何をやるかということで、例えば自然教室を1泊2日にして、その代わりに修学旅行にもう少しメリハリをつけるという、そのような工夫を今回決定をしたということをお伺いしております。農業体験についても門外漢なんですけれども、今年の夏、北海道のニセコの蘭越町という所に行きまして、我々も旅行者の方々と一緒に受け入れ先の体験をしてきたわけですが、そこは近くにニセコのペンション村がありますので、分宿とか、もちろんホテルなどもあるのですが、それぞれ小さなペンションで分宿できるわけです。実に蘭越町の受け入れは私が見ても感激いたしまして、よかったなと思うのと、我々ももう古い世代ですから知っているつもりでしたが、北海道の低農薬野菜というのは農薬を使わないと低農薬にならないというような、無農薬は低農薬では

なくて、低農薬野菜で宣伝したり、売るためにはちょっと農薬を使うんですとか、そうなんですかというような体験を 2,3 時間の中でできたので、農家民泊とはもちろん違いがあると思いますが、私は農業というものを理解する一端になったのではないかと考えています。

新井：ありがとうございます。それでは高山先生、お願いいたします。

高山：遠藤先生からありましたように、農家に民泊というのはいいですね。私もぜひそういう経験をさせたいなという思いがあります。先ほど紹介いたしました、私のところは半日しか農家で体験ができません。半日でも子どもたちは、たいした作業はやらせていただけないのですが、乳牛などを飼っているところに行くと、乳搾りをやらせていただくとか、いろいろ農家のほうでも工夫をしていただいて、最後にはお昼を食べて帰ってくるのですが、本当に喜んで帰ってきます。子どもたちは軽トラックの後ろに乗るのが大変嬉しいらしくて、とても楽しみにしてそのようなことも体験してきます。

私も会津地区で、1泊で受け入れてくれないかということで探したのですが、難しいですね。なかなか子どもたちを宿泊させるということは、やはり、それなりの責任もあるでしょうし、いろいろな難しい問題もあるようで実現できないのですが、私はその代わりにできるだけ、自分がどういう農家に行くのかということと事前に調べさせたり、関わりを持たせてあげられればいいと思っています。今のところ、相手のことが当日まで分からないのですが、事前にそういうものを知らせていただいて、交流ができて、実際に行って、また帰ってきた時に手紙のやり取りができるというような、そんな体験をさせたいというように考えています。しかし、宿泊はなかなか難しいようですね。

それと林間と修学旅行。私の近隣の市では、何年か前までは皆それぞれの自治体が施設を持っていました。軽井沢や菅平に施設を持っていて、そこに学校の子どもたちを宿泊させるということがあったのですが、最近はそういうものも全部閉鎖されて、千葉県にもあったのですが、それも今はもうやっていないということで、そういう意味ではさびしい限りですね。ですから全て個人負担で行くということになるわけですが、やはり、質問された方と大体同じくらいの費用でやっています。どこが違うのかということについては、林間学校というのはその名前にもあるとおり、学校の延長。学校を移動してということと考えています。修学旅行というよりは、どちらかという集団宿泊活動、集団生活、特別活動というような色合いが私の学校では濃いんですね。ですから、自然体験をさせる。

夜のキャンプファイアなども行いますが、これは総合学習にはなりませんので、どちらかというの特活のねらいを達成させるという部分が大きいと思っています。それに比べて修学旅行はどちらかといえば文化体験のようなもので、私のところは京都、奈良ですから、そういう日本の古都に行って、その歴史的なものを肌で感じようという、こちらはむしろ総合的な学習の要素が多いように私は考えています。どこで線を引くかということについては明快にお答えできないのですが、そのように私は考えております。

新井：それでは最後に吉田先生、お願いいたします。

吉田：林間学校という言葉は、今はもう歴史上の言葉になっているのではないかと捉えています。今ではむしろ自然教室とかというような形で言われることのほうが多いのではないかと考えていますね。以前、昭和の40年代までは、林間学校及び臨海学校という言葉が頻りに使われておりました。そして夏休みともなれば、ほぼ全ての学校が学校行事として林

間学校あるいは臨海学校、中にはその両方を運営されている実態がありました。ところが、昭和 45 年頃を境として、林間学校及び臨海学校がなされなくなりました。その理由を 5 つにまとめたものがあるのですが、一つは自然が遠くなったということですね。昔は房総線に乗れば、千葉より手前に幕張であるとか海水浴場があったわけです。ところが今では、富浦より先に行かなくてはもう海水浴場はなくなってしまった。中央線に乗れば、三鷹辺りまで行けば、昔は武蔵野と呼ばれるところが広がっておった、しかし今では高尾まで行かねば、中央線の車窓から緑が見えないというような状況ですね。強いて言えば、そういうところで身近なところで気軽に親しみをもってというのが林間学校と呼ばれていたのかなと思っています。

もう一つは、学校に対する主催者責任というものが、非常に強く問われる時代になってきたということ。それから、臨海学校にしてみれば、学校におけるプールの設置率がどんどん向上して、強いて海まで行かなくても水泳学習ができるようになったということですね。しかしこれが大きな墓穴を掘りまして、プールでは泳げても海では泳げない子どもというものを、どんどん作ってしまったわけですね。大きな線引きは無いと思います。修学旅行であっても、内容的には林間学校のような内容をされているところもたくさんあります。

ただ一ついえることは、学習指導要領の上に文言としての取り扱いがあるかないかということだけは、これは歴然としていると思います。この点については、新井先生の方がお詳しいと思いますので。林間学校というものについては、文言として出てきていないはずですね。修学旅行については、その内容の説明、取り扱いについてから解説があるはずですね。強いて言えばそういった違いかなと思います。

それから、農家についての受け入れの問題ですね。農家に限らず、漁村でも、あるいは立派な旅館、ホテルであろうと、受け入れ側としてのメリット、やりがい、それだけではないでしょうか。そのメリットというものは、決して経済的なものだけを指しているわけではありません。地域の名を広めるとか、やりがいという意味で、それが薄いものになってざるを得ないですね。その一つが、継続するということの難しさです。これは何でもそうです。このような大会、会議もそうです。何回という会の継続、それこそが一番の実力になっていくわけですね。文化、財産になっていくわけです。継続するということの困難性があると思います。農家のケースで言いますと、これはいわゆる「めぐりツーリズム」といわれている、農家滞在型の旅行形態というものが、修学旅行に限らず、一般の方々を対象にして、わが国にも若干アピールされた時期もありますが、今ではさほど言葉として聞かれないですね。やはり受け入れ側の態勢が、わが国ではどこかに無理があるということですね。これは、南フランス、南イタリアの農村部では今なお盛んに行われております。

大体 2 週間から 1 ヶ月滞在いたします。そこで農耕体験をしながら、修学旅行と少し外れますが、学校教育の中における農耕体験あるいは農耕学習ということで行われるケースがあります。時期に応じて田植え、収穫 = 稲刈りということで行いますが、実は本当の農耕体験になっていないのです。田植え、種まきの後は、お百姓さんが責任を持って育ててくれる、そうして育ててくれた稲をただ刈り取るという、瞬間にしか携わっていないような形で、本当の農耕体験、育てるということをやはり一番大事な部分が抜けてしまっていると。そういうせめて農耕を体験するツーリズムとしては、2 週間から 1 ヶ月が必要

だというように言われております。そういった面で、全てのこういった農家の生活を教えたいけれども、たかだか1泊していただくだけで、本当に何を分かってもらえるんだろうかという思いも、おそらく農家の方々にはあるのではないかと思いますね。やる以上は、我々の考えていることを全て教えるためには、もっともっと時間がほしいということもあろうかと思います。

それと別に後藤さん、全日空相手に喧嘩を売ろうというわけではないのですが、飛行機の旅。それは非常にダイナミックで面白いのですが、同時に各駅停車の旅のよさ、そういったことも味あわせるような旅の存在。そこまで含めて、子どもたちには、旅の面白さ、よさ、有意義さ。例えば江ノ電の旅。江ノ電の修学旅行で十分中身のあるものができると思います。別に喧嘩を売っているわけではありませんよ（笑）。そういったことも含めて、やはり、目的と対象地域の旅ですね、それを十分に考えていただきたいと思います。

それらを含めて一番大事なことは何かというと、集団であることの必要性。大量受け入れが可能である場所、それが修学旅行としては外せない条件になると思います。そういった意味で、農山村あるいは漁村という小規模な本当にいい文化、環境を持っている地域があるんですね。これをぜひ都会の子どもに味あわせたい。しかし受け入れ側として、今のよう様々な問題があるという時には、やはり修学旅行としては手をつけてはいけない聖域というものも残しておくべきではないかと思えます。そして修学旅行で、本当によい学習をし、感動をし、発展させて、よし、もう一度自分でという時に、小規模、個人で初めて行くべきレベルの高いところでの位置づけとして、そのような聖域にあたる場所は残しておくべきではないかと思えます。

修学旅行ではないのですが、わが国の学校行事のあり方として大きく問題となりまして、それはすでに改善されました。昭和30年代ですが、学校行事として集団登山が非常に活発に行われていたことがあります。これが自然体験活動の一つのさきがけです。集団登山という一つの形態で子どもたちに登山を行事として活性化させたがために、山における登山道の自然破壊がどんどん進んだんですね。ということで、やはり自然の中での活動、自然を対象にした活動は、集団という単位での活動は極力控えよう。小グループとしての単位の方が自然にも優しいし、教育効果も高まりますよ、ということ、我々は研究データを基に提示をして、今はもう野外教育活動、学校でいう林間学校などでは、大量一括集団指導は行いませんね。個別、グループ、班別指導ということが基本になっております。そういった意味でも、林間学校と修学旅行の違いがあるといえはあのかもしれません。ということで、まとまりませんが。

新井：ありがとうございました。若干時間も過ぎておりますので、私の方で特にまとめるということはいたしません。今、民家に宿泊をして農業体験をするということのお話で、なかなか難しいということ。実は一昨日、長野県の弥栄村という、これは山村留学の発祥の地でございます。今日、収穫祭をやっております。センターに宿泊をしたり、そこに2週間単位で泊まるというようなことの中で体験しておりますが、そういったところは全国に270箇所くらいあるんですね。ですが修学旅行という形で大勢の生徒さんが行って分宿していくということはなかなか難しい。今、吉田先生がおっしゃったようなことなのではないかと思えますが、具体的なことはもう時間もありませんので割愛をさせていただきます。最後にまとめということではなく、一つ二つ感想のようなことを述べ

させていただいて、終わりにさせていただきます。修学旅行の「学びを中核として創造していく」ということでしたが、その中で、やはり学びということには、教育的配慮というものが重要ではないかということ。

それから集団というものの重要性。集団で旅行をする中で、非日常的なふれあいとか、体験というようなものが重要だというお話がございましたが、その非日常性ということで、一つこういうことがあるのではないかと申し上げたいのは、子どもたちが集団で旅をしていく中で、子どもたち同士、あるいは先生の非日常性、または友達の非日常性というものをお互いに発見するということですね。学校の中にいた時には見出せなかった友達の意外な側面とか、そのようなものを互いに見出すという。そういう意味での非日常性というものがある。これが旅というものの意味の中にもあるのではないだろうか。そういう意味での団体の重要性、集団の重要性ということがあるのではないか。もちろんこれは、林間学校等の中でもそういうことがあると思いますが、旅というものには、そういったものがたくさんあるのではないのでしょうか。自分の何十年も前のことを振り返ってみても、そういうことがあるように思います。ということで、修学旅行については吉田先生が予測されましたように、停滞といいますか、若干抑制的な方向が出るということも想定されるということですが、しかし、今いろいろとお話し合いをいただきましたように、修学旅行の教育的な意義というものは大変大きいのではないかと思います。ますますこういう時代の流れの中で、直接いろいろな人とか文化とふれあうことの重要性ということは、IT時代の中で大きくなっているのではないかと思います。修学旅行をますます充実をさせていくにはどうしたらいいかということで、今日はお話をいただいたわけですが、そういう面で大変重要なサジェッションというものを、今日はたくさんご提言をいただいたように思います。ということで、まとめにはなりません、時間も大分超過をしてしまいましたので、ここでシンポジウムを閉じさせていただきます。4人の方々ご発表ありがとうございました。拍手をいただきたいと思います。ありがとうございました。